



古本屋の戦後

囚われし頃

古川 実

あるが、その二三年前から『日本古書通信』で個人名の通信販売を始めていたので、本当の意味の創業時期はそこを曖昧なものである。

私の前職は国鉄職員で、全国車号連絡協議会北海道議長などと稱していた時期もあり、末は悪くても中間駅の駅長位には落着く筈であったが、急転直下製紙原料商即ち紙屑商としてリヤカーを曳くことになったのである。この辺のいきさつは、『北の文庫』十号に「斜視と古本」と題した小文に書いたもので、ここでは省く。因みに北の文庫は現在千葉の放送教育開発センター情報資料室長藤島隆氏が札幌在任のころ編集していた図書館人の交友誌を兼ねた業務研究誌である。

さて取引先の製紙会社では、結構なお身分から紙屑商に変身した私を、鳥渡毛色の変った人間と見ていたらしいが、レッドバギーにも非行にも関係なしと判ると、随分好意的に扱ってくれた。先ず会社の広大な敷地に幾棟もならんだ原料倉庫は、従来は外来者お断りで市内の古本屋の出入禁止になっていたが、私一人だけは目に見てくれることにな

った。但し債権債務、殊に人事関係の書類等は持出し不可で課長がチェックするとのことである。許可を得て、初めて未選原料倉庫に這入る。矢張りこゝは古本屋の処女地であると思った。人の腰ほど一定の長さで棒しりになった官庁松下げの故紙が山積みされている。それらが『北海道旧土人保護沿革史』とか『北海道移民史』の類で、驚いたことに同じ本を何十冊も束ねたものである。傍らの古びた木箱の中味を一冊引き抜いてみると、地券表紙に往来翰控・函館出張所と達筆の墨書がある。読み込んでみると紛れもなく、よく噂には聞くが一度も実物に接したことのない明治初期の開拓使文書というものらしい。急に不安と期待が全身に疼いてくる。薄暗い倉庫でせつせと本を選び出しながら、これが全部自分のモノになるのだと思うと何だか夢のようで、まことに至福のひとつであった。

その頃入手した本の数々はほとんど記憶から失われている。本は手許に数日置くだけで次々と『古書通信』で識り合った市内の古書店に売って生活の資にしていたからである。しかし人の絡みで僅に覚えていたものもある。迅速地図の百枚セット、米人ライマンの『北海道地質図』、村上英俊の『仏語明要』、序図

少傷みの杉田玄白らの『解体新書』、揃いに近い竹久夢二のセノオ楽譜、北原白秋自筆の短歌のまくり三枚など。むろんこれを特別の稀覯書という積りはないが、このあと私には再度の御縁がなかった。また当時それ程に珍本でなかった『司法研究資料アイヌの犯罪』は昨今の市場から全く姿を消してしまったので、反って鮮明に記憶している。

昭和三十八年頃から北海道にも急速にテレビが普及しはじめると、その影響でさしも全盛を謳歌していた貸本店にも翳りが出て転廃業が続くようになった。私も貸本に見切りをつけて古書専業の決意を固めた。後年若い店主石川昌治君の口から度々「他店の肥やしになるばかりじゃ能がない」という言葉に接して、私はひそかに苦笑した。当時は正にその通りの心境で、あなた任せの業者持込みを控え目にして、自店の肥やしにすべく郷土物を部屋の押入れに貯め込んだ。

昭和四十年、私は郷土史料中心の古書通信販売「えぞもくろく」第一号を出した。折しも北海道明治百年を目前に控えた時期であったので官民ともに活気が漲っていた。私はこの上昇気流を運良く捉えたのである。昭和四十三年に北海道立図書館は郷土資料室を北方資料室に改

稱して、文献蒐集の範囲も樺太、千島、ソ連極東部沿海州に拡大する見解を示した。業者もこれに追隨してそれらの文献類を北方資料と統一して呼ぶことになったが、それは同時に巨大な資料の需要が生れたことを意味するものであった。おまけに旧道庁舎を改装した赤煉瓦の中に新北海道史編纂のため北海道史編纂所が新たに設置され、また開拓使文書の解説作業と関連文書蒐集のため行政資料室が生れる運びになっていた。第一号は製図屋に依頼した青焼きの折本形式の奇妙な代物であったが、この機運に恵まれて小成功を収めて、昭和六十二年の五十三号まで継続された。以後は「さっぽろ通信」と名を変えて二十号の今日に至っている。

北方資料は昭和五十年代までは確実な売れ筋商品であったし目録の目玉商品でもあったので、その後も熱心に蒐集に努めた。前述のような素人商法が出发点であったので、アイヌ絵と古地図は既存の老舗にお任せして書冊に限定した。特別な抱負もなく生活の糧を得るため流れるまゝの年月であったが、いつしか北方資料が面白くなり、その魅力にのめり込んだ。私達の蒐集が先生方の業績に光を添えることもある。後年私が初めて発掘した、北海道では

幻の本であった特高資料「特高関係要警戒者一覧表」もその当時であったなら、必ず新北海道史の一頁に写真入りで掲載されたと思われる。北海道立図書館の創立五十周年記念式典に招かれて出席した。錚々たる名士のほかに新刊書側は栗田出版、丸善、紀伊國屋等の顔触れで、特に栗田出版は戦後誌のあらゆるバックナンバの大量寄贈の功労者と同じっている。古書店側は弘南堂高木庄治氏と私の二人のみであった。業界の名声実力から見ても弘南堂さんは穩当であるが、私の列席は小店の分際で破格の感じが伴った。組合には名実ともに優れた老舗や先輩は多いが、道立図書館の納品実績という点からはその人達を、抜いた、という感慨が胸をよぎった。

それは確か昭和五十年のことである。私の年齢は昭和暦年数に8を加えたものであるから五十八才であろう、この前後から一種のうつ病にかゝっていたようである。それは更年期というものの疲労が重なったものか分らない。就寝中とつぜん耳元でパァンと大きな破裂音がして飛び起きたりした。夜中に隣室の電話機の信託音を聞いて目を覚ました。次の信託音を聞いてから起きようと身構えたが、それつきりで悪戯電話か幻聴か判らず仕舞になった。或る夜

耳元でハッキリと「たとえ奈良絵本でも、そこに田村麻呂の蝦夷征伐とかアイヌの朝貢の図がなければ、タダの紙屑さ」という声を聞いた。私は枕に頭をつけたまゝ、声の主について自問自答を重ねた。私の頭に妖怪みたいなものが巣食っている、そいつが時々音をたてたり本を窺めさせたりしているのではない。奴はいつもテレビシーカ何かで私に指示するのだが、うっかり肉声で喋ってしまったのだ。実に他愛のない妄想であった。しかし本蒐めの妖怪も悪くないと思っている。その後幻聴は自然と治ったが耳鳴りの症状は続いている。

こゝまで書いて来て、私はNさんのことを思い出した。今どき妖怪をうんぬんすると、大方の人はゲゲゲの鬼太郎の説き過ぎだと笑うことであらう。しかし私は感得する。Nさんが東千歳駐屯の陸上自衛隊に配属になったのは昭和四十六年頃である。特に北海道を志望したわけではなく自然の成行きであった。出身地は岐阜の山奥とのこと柿の美味いという話をした。日曜の休日毎に札幌に出て来て各店から北方資料の古書を買ひ漁った。私の店では上客の部類で時には晝食を共にしたことがあるが、あまり下卑た食事マナーに呆れた。俗に犬食いと言う

ものだろうが、更に加えて野獣がかりつくようにガツガツと貪り食うのである。店内では本を選びながら、音を立て、放屁する。その粗野な挙措は郷土研究者の學者者らしからぬものだが、戦争のときは遅く頼母しい存在とも見えた。Nさんは私の店に本代六万円のツケを残したまゝ、半年姿を見せなかった。その間彼は都心の店で十数万円の蝦夷地図や鳥居電蔵の千島アイヌ等を盛んに買い込んでいたのである。私は中隊長に直談した結果、数日後Nさんは悄然と中隊長に伴はれて来店し代金を決済したが、そこで縁が切れたのである。

その後もNさんは自衛隊の給料では賄い切れぬほどの熱狂的な北方資料の蒐集を続けたことは同業者の噂で知ったが、私には既に無縁の人でしかなかった。それから四年後にもう一度Nさんに会うことになった。私の新店舗にかなり憔悴してすっかり面変わりしたNさんが訪れて来た。服装も労働着にサンダル穿きて、粗野な仕草だけは以前と変わらず、久闊の挨拶もなく「炭鉱鉄道手帳帳内間賃金表を差出して、これを担保に一万円を三ヶ月借りたいとのことである。赤い古書展の帯紙がそのまゝで懐しい。Nさんは既に自衛隊を退職して目下日雇生活という。退

職金はすでに北方資料購入で使い果たらしく、私は理解に苦しんだ。返済の時、蔵書を少し処分されたら如何ですと尋ねると、「私は本は死んでも売らない」ときっぱり言い切った。

死んでも売らない筈のNさんの蔵書が、こともあろうにチリ紙交換業者の手で運び出されたのは昭和六十二年頃のことである。前年とつぜん精神に異状を来し市内の病院に収容されていた。家主は長期入院となり空部屋場所ふさぎのダンボール箱六十箇の本を、左程価値あるものと知らずに紙屑として処分したのが真相であらう。その一部が古書店に流れてNさんの悲惨な末路が知れたのである。

Nさんが北方資料の蒐集に手を染めたのは最初隊内での学習の参

考資料として必要であったからだと思う。当時の陸上自衛隊の軍事訓練の假想敵國はソ連であり、その豫想戦域は北方領土周辺であったと思はれる。その後Nさんは妖怪の囚人になったのである。妖怪の正体は、多彩な学術文献が複雑に絡み合い形成された北方資料のおもしろさ、その魅力と考えたらどうであろう。岐阜の山奥から何の縁もない北海道に来て、古本蒐集にのめり込み破滅への道を辿ったNさんを理解できるような気がする。

（札幌 えぞ文庫主）

最新版 好評発売中！

全国古本屋地図'95

B6横判 四〇〇頁

定価一八〇〇円（税込・千三百一十円）

日本全国約二五〇軒の古本屋を紹介。各店への道順、取扱種目、定休日等を解説、主要都市地域の案内図一〇〇図挿入。分野別古書店一覧（東京・京阪神地区）、古書即売会一覧、文学記念館一覧、紹介全店の住所・電話番号簿、今回新たに五十首順店名索引を収録した。

発行所・日本古書通信社

古本屋の戦後

「忘れ得ぬ人々」

鳥山将平

昭和二十九年の秋、一人のベレー帽の青年が市バスに乗って、名古屋古書組合の市場に向っていた。丁度乗り合わせた歌人の本屋が目止めて、あるいは同業かといふかったという。予感のとおり、二人は相次いで同じ市場へ足を運んだのであるが、これが私の古本屋第一歩であった。自分では古本屋の雰囲気を感じていていたとは考えられないのだが……。

父が突然死んで以来手伝っていた家業の味噌屋から、商売の水に馴染み切れず、三年足らずで離れることになった。もともと理科系の学生で学徒動員で結核にやられ、足掛け六年ばかり、病院と大学の間を往來しているうち、徹しい理学の先端からはとり残され、鬱屈として脇道の方へ向いてゆくのだった。その時に座右の書となったのが辰野隆さんの「忘れ得

ぬ人々」であった。正篇から続編へ読み進んで行つて、新しい世界が展開されて行くことになった。アンカットのフランス装の手触りが今も懐かしい。

後に古本屋への道を案内してくれることになったA書店には、本を売りに行つたのははじめて、様々な友人を紹介されたり、時には店頭で一升壺を持ち込んだこともあった。尤も主人は見掛けによらず下戸で、私ひとり楽しんでたようである。焼け跡に建てた一間半に二間程の店で、土間には古い土台のコンクリートが顔を見せている。主人は昼間は他に勤めながら力を蓄えていたところだった。常連の客が入れ替りたち替り主人と本談義を交わし、街の文化サロンをなしていた。本の動きも活潑で戦後はこゝから開けていった想いである。

A書店の常連で頭脳明晰の権化のようなS助教教授に、古本屋になろうかとの思いを洩らしたところ「君ならいいかも知れない」と笑われた。本には縁の薄かった理系の学生くずれにとって、それも挫

折の人生に灯った小さな明りだったかも知れない。

なまぬるい性分で、つとめてキチンとした店を設計する甲斐性もなく、資金も友人の助けをかりてデモシカ本屋が始まることになった。しもた屋の玄関を利用し間口一間奥行き一間半、棚は手作り、毎日格子戸を外し外の戸板に雑誌を並べて開店ということになる。応援にかけつけてくれた院展の先生がのれんを手染してくれたり、文字通りみんなに支えられての店開きだった。

こうして古書市場の初日、A書店の一々の手引きで、序列の厳しかった先輩方にも引き合わせて貰った。古本屋の生活が始まったのだった。当時はセリの市だったから、Aの大きな声と熱意は他を圧倒していたし、不屈の意志で永年の間一日も市を休むことがなかったと思う。私もあやかうと心掛けながら段々市に馴染んでゆくのであった。

ある日紙の悪い本の山の中から、山代巴さんの「落のとう」を見付けた時は、心臓が本当に高く鳴った。どの雑誌だったか初出の時に読んで感動を覚えていたもので、この本は当時の赤松俊子さんの装画なのも嬉しい。それから文

庫の「原爆の図」へ、又中井正一さんの「美学入門」へと、私のきつやかな銭にならない書物探求が拡がってゆくのであった。

昭和三十三年の秋、大府から岡崎へ移って来た。街の中心には近いものの、一筋脇へ入った場所、五坪程の小さな店である。先輩の書店主が、表通りに看板を出さなくてとは忠告してくれたが遂にそのまゝ、来る人は来てくれるだろうと居直ったまゝに過ぎてしまつた。その頃漸く業界も落付いて来ていて、戦後華やかな一時期、戦前からの店と引揚者旧軍人等々、岡崎だけで三十軒ほどあった店が十数軒(西三河全域で二十数軒)になっていた。尾張と三河とは両つの国のお国振りの違いから別々の組合を作り、三河は名古屋の商圏に飲み込まれまいと肘を張っているという状態であった。

昭和三十三年にはじめて岡崎で大手を開いたが、その後は東三河と西三河と協力し合つて交互に大手を開くようになり数年続けた。これが市会の活性化や組合の明朗化につながっていったように思う。しかし地方の月例の市は低調で、専ら名古屋の市場にたよる事になっていったが、そこに集った異色が豊橋の冬日書房、刈谷の西村

書房と私の三人組、二人は吹き荒れたレッドパージの風をくらって本屋を始め、私はシンパ。心情において通ずるものがあつたのか、顔を合わせた時から太い絆で結ばれることになり、三河の三人ということでさんさん会がはじまつたのであった。

昭和三十五年の安保騒動の時から学生運動のたけなわの頃、私の店も学生自治会の分室の趣を呈していたものだった。その頃の学生達は誰がどんな卒論を書いているのかも解つていて、資料探しに手を貸したことも懐かしい。その頃の卒業生たちは今も近くに來るときつと寄つてくれる。

昭和四十一年になって、さんさん会でまた目録をはじめようかというところで「古本あらかると」を出しはじめた。三年程の間に反戦平和、フランス文学とその周辺、雑誌特輯、編年戦後文学などテーマ別に十三号までを発行した。うちでタイプ印刷を始めたのもこの頃で、はじめは目録を作ろうと思った訳だったが、障害者の働く場としてふくらんでいって、次第に母屋をとられるような格好にもなつて来てしまつた。あらかると十四号が出なかつたのは、他の仕事に追われて延び延びになつてい

る内に、原稿の手直しをしなくてはならなくなるし、やがて冬日書房の事故死によつて中断してしまつた。返す返す済まない事をしと思つている。

印刷の方は労音の機関誌とか地方の歌誌、句誌、また大学関係の紀要など、手がけた仕事はずっと引き続きやらせて貰い、お蔭で従業員たちも勤続のベテランとなつて来、安心して任せておける様にはなつて来ていた。私は本屋を止める心算は毛頭なく、細々とでも古本屋ですと言ひ張つて来たが、二足の草鞋は互に引張りあつていたのかも知れない。結局どちらも成績を上げていない。見廻してみ

ると、古本屋の盛業は店を守る奥方の功が大きいのを痛感するが、私のところはカミさんの外助によつて支えられていたと言える。ひそかに感謝したいと思つている。

先に触れた地方の大手については、身近かに範となつたのが岐阜の納涼市会であった。毎年の夏大都市の大手を避けて行われたこの市は、B書店の人脈とアイデアに彩られた楽しい市だった。「市場敵憎」にもくし懐かし」の名句が、当時のアットホームで厳しい雰囲気を与えて心に残っている。こゝで書肆ユリイカの本と嬉しい出合いがあつて、そのリストを作



りかけた。80%ほどには達しただろうが、伊達氏自身の「ユリイカ抄」が刊行されて反故。序に言えはハーパー・リードの邦訳書誌に気を付けているのだが、地方にいては本に接する機会も少く、日暮るるに途はるか遠しと観念している。

先年三河地域史研究会で、三河の本及び本屋について話をしなくてはならなくなった。近藤恒次氏の本などを引張り出してお茶をにごしたのだが、愛大の田崎先生から「これらの本にみな目を通したか」と聞かれて、赤面せざるを得なかつた。どうも中途半端なことしかしてないようである。

西三河の組合も発展を重ね、組合員も四十名余を数え、毎年春秋の二回大きな市も出来るようになった。和やかな結束の固い組合である。

昭和五十七年から組合の補助で「ふるほん西三河」を発行するようになった。有志の販売目録集の頭に三頁ばかりの小文を付けたものの、小文を付けることはさんさん会の当時から思いが実つたものである。季刊で休みなく五十号に達しようとしているが、全国からの暖いご支援があつて永続性をしているのである。多くの方々から

主にこの地方の人及び書物に関わる原稿をいただいていて有難く、特に森統三氏、安部公房氏について等、貴重な資料であつた。時々原稿が切れると四苦八苦の勉強を迫られ、杜撰なものをお目にかけている。本文の出版書目、大竹博吉氏の著作目録など、いずれ改訂増補しなくてはならない。小店の目録を見返してみると雑本が多く、これも自分の素顔をさらけ出しているのだと覚悟をきめているのである。振り返ってみれば、小は小なりに小を守つてきたことが、期せずしてささやかな自由を保つてこられた所以なのである。

本を売って生業としている以上、本は売らねばならぬ。大体自分の好きな本を売っているの、心の片隅に、本を売りたいという本心がのぞいている。現実には客と話が弾み気が合えば、結局秘蔵の本も見せ手放すことが多い。客それぞれが持っている文庫をより充実するのが本屋の仕事であろうが、せつない業である。自分の文庫も持ちたいというのは烏滸がましい事なのだろう。このわがまゝを残すかぎり、所詮素人商人の域を離れることが出来ないのが解つていて止められない。永年に亘つ

てこれを温かく許して来てくれた顧客たち、また仲間たちがいることを有難く思っている。

AB両先達のことは少ししか触れられなかつたが、戦前に小僧から叩き上げて、この道一筋に貫いた人たちである。地方に在つて目立たないけれど、立派な業績をあげておられる。二人ながら類いまれな一徹さをおし、一挙一投がいまも私達の上に尾を曳いている。それでいて外面には出さぬように努め、自分では「俺は腹を立てないぞ、頑固ではないぞ」と言い張つておられる。奥様は大変だろうと思う。二人とも現在現役を離れ、悠々と本の世界に遊んでおられるようである。二人に本の話、本屋の話是非書き残して欲しいと思つているのだが、頑として応じて頂けない。私がこんなものを書いてしまつて、両先達から、苦が笑いで叱られるのが目に見えるようである。





古本屋の戦後

古本屋ふれあい人生

桑原 弘

テレビが普及しはじめた頃、大宅壮一が「テレビで一億総白痴化だ」と過激な発言をして、大きな話題を呼んだことがありました。

評論家とは大げさなことを言うものだ。別に本の売上げが落ちこんだということもないのに・・・とその時は思ったものでした。三十数年たった今改めて思うのは、まさかこんなに人々が本を読まなくなろうとはという慨嘆です。

顧みますと、私が家業の古本屋を継いだのは、戦争が終った昭和二十年の秋でした。

あの頃の日本人は、虚脱感とひもじさにさいなまれながら、一方で活字に飢えていました。とにかく本でさえあれば右から左へ飛ぶように売れたものです。

西田幾多郎の「善の研究」、阿部次郎の「三太郎の日記」、倉田百三の「愛と認識との出発」など、とくに哲学や思想関係の本は眼の色を変えて引っぱりだこでした。

たまたま店の本棚に一冊並べていた「善の研究」を、「あつたッ」と同時に見つけた学生が、奪いあいのあけくジャンケンで買ってしまったこともありましたが、ひもじさに耐え、時には水で腹ふくらしてでも、欲しい本を手に入れようとした当時の学生の真剣な読書意欲は、いうならば敗戦の焼跡から何が何でも立上ろうとする、当時の日本人のけなげなバイタリティーの、これも一つのあらわれだったのかも知れません。

俄かに古本屋が増えて、松江市内に八軒の店が競いあつていた戦後三、四年の間が、古本屋の云わば黄金時代であつたでしょう。

昭和二十四年ドツヂの緊縮政策から、世の中が猛烈な不景気

に見舞われ、古本屋の世界にも急激な転換期がやってきました。洪水のように出廻ってきた鮮やかな新刊書に圧倒されて、戦前本主体の古本屋の店先はどこも閑古鳥が鳴くようになり、二十五年にかけて次々転・廃業に追いこまれてゆきました。もうその頃には、戦前の観念論の哲学書など見向きもされなく、市会へ送り出したものも二束三文でした。

古本屋へ足しげく通う本の「極く好き」な人——今はすっかり少なくなったそういう人たちの中で、心に残る忘れ得ぬ人々があります。

古風な中折帽子に、書類のギツシリ入った重そうな大きなカバン、口を始終もぐもぐさせながら、肥った大きな体を左右へゆするように、ノツシノツシと入ってきて、開口一番「よォーッ」と大きな声——今でもそれが目に浮ぶのは、県の町村会長をしておられた尾崎卓郎さんです。

「松江へ出ると、息子んとこへは寄らなくても、君んとこだけは立寄らぬ訳にゆかんヨ」破顔

大笑しながら「何かおもしろい本は出てないかい」と催促される。時には茶菓子や頬ばりながら、天真爛漫な自慢話がはじまる。

「ボカこう見えても太鼓の名人でな、このあいだ村の祭りに、大勢の見物人の前に双肌ぬいで、テンツクテンツクドンドンと、ハー見事な太鼓を打つてみせてやったよ。予想外の腕前に村人がみんな目をむいて吃驚していたなァー、ワツハツハツハツ」

戦前、北大の学生部長や大阪外語の学長をしてもらったので、東京へ陳情に出ても、各省にえらくなった昔の教え子がいて、先生々と、どこでも大いに顔がきいたということです。

うちの店へ立寄られた翌日の寒い冬の日、突如急逝されてから、もう三十年が経つでしょうか——。

「オラから酒と本をとつたら、生きちよる甲斐があゝまっせんでネー」そう云いながら、晩年のMさんは朝から焼酎をひっかけていました。酔っぱらってやってきて、安い本を漁っていつては、しばらくたつとすぐ又それ

が焼酎代に変わるのです。時には汚れた文庫本に卵を一つ二つ添えて持参し、焼酎代の四十円で引取ってくれと云いました。

戦前、赤として監獄にぶちこまれ、軍隊では要注意の一兵卒としてさんざんいたぶられたMさんが、酔って椅子に腰据えるとき——昔の苦い鬱積された思い出が、ふつ、ふつと脳裡によみがえってくるのか、ロレッツの廻らぬ口調で語りかけるのでした。

「戦争に負けた日でしたワ。営庭で『日本なんか、日本なんか戦争に負けてよかったワイ』と云ってやったら、聞き咎めた将校奴が、軍刀を抜いて貴様殺してやるツーと、ボーチャゲて来ましてネ——」一しきり語って、又酔いにうなだれながら、

「オラのこんな、くだらん話を、黙って聞いてござっしやるのは、クワバーさん、お前さん位のもんですワ」そうつぶやきながら、

老いて脆くなった涙線をにじませるのでした。

昼間から酔っぱらって、しょっちゅう大道にぶつ倒れ、周りのものにすっかり疎んじられていたMさん。そのMさんが、昭和

和初期演劇運動をやっていた頃ひそかに手に入れて、あの弾圧の時代から戦後まで大事にかくし温めてきた雑誌が、今も私の手許にあります。「戦旗」「前衛」

「プロレタリア文学」、あぶらに汚れ、表紙のいたんだそれらの雑誌。それを手にとるたびに私は、今は亡きMさんの苦澁に満ちた思いや、孤独な哀しみが伝ってくる心地して、思わず涙を禁じ得ません。

Mさん。酒と本の好きな市井の表具師で、善意のかたまりのような人の好い、そしてナイーブな詩人もあつたMさん。そのMさんの名を三島慎一郎さんと言います。

若い頃から古本屋歩きを楽しみ日課として、本の虫のように書物に親しみ、自ら「書痴」と稱していた人に小竹原浅助さんがありました。氏は戦前神戸の町に住いて、あちらで蒐めた考古学や古美術関係の本には素晴らしいものがありました。戦災で殆どを焼き、疎開していた一部の蔵書が残ったゞけとの話でしたが、それでも氏の全盛時代に買集められたものだけに、

古本屋には誕れの出そうな本が書棚に並んでいました。

郷里へ帰ってからの戦後の氏は無遇でした。志世に容れられず、病気で職を退いてからは、ノイローゼになったりして、生れ在所のさゝやかな家に、老妻とふたり、淋しい憂悶の日々を送っておられました。昔蒐めた

赤絵の皿や中国の古陶磁などは殆ど売払ってしまわれたけど、書物だけは終生手離そうとされませんでした。

四十九日を過ぎた初秋のある日、靈前に線香を手向け終った私に、憔悴の色をにじませた老未亡人がこう仰言いました。

「主人が大事にしていた本は、地元の資料館へ寄附致しました。生前あの人のことを、心ない世間の人々は、気狂い位にしか見ていなかったようです。ですけど、せめてあの人の愛した蔵書を通して、世間の人々が少しでも故人を理解して下さるならば、それがなにより嬉しいことに思われたからです・・・」

私はひそかに自分を恥じ、深く心を打たれながら、思い至りました。あの蔵書の一冊々々に、氏の思い出と愛着と、過ぎこし

かけがえない人生が投影されてあつたであろうことを——。

今の学生のアルバイトは旅行や遊ぶためのものが多いようですが、親も貧しかったひと頃の学生のアルバイトは、それこそ苦学でした。

大分以前のことです。うちの店へ始終出入して、本を売ったり買ったりしていた島大生がいいた喉をうるおそうと近くの喫茶店へ入りました。その時、その学生が店内を珍らしそうに眺めながら、こうもしました。

「僕は四年間の学生生活の間で、こんな一般の喫茶店へ入ったのは、今が初めてゞすよ」私はその言葉を聞いたとき、思わずホロリとなりました。

蔽衣破帽、放歌高吟して大道を闊歩した昔の旧制高校の生徒は、ロマンチストでエリート意識に燃え、ブルジョアの子弟が多く苦労知らずでした。今の学生はアルバイトは当り前、社会により密着して生きているから、

現実的です。甘いロマンチズムをかまげる代りに、社会の矛盾や弱者の存在に敏感で、ボランティア活動も活発です。今回の大災害にもいち早く立上った若い人たちの姿を見て、日本の将来も満更ではないと意を強くしたことでした。

古本屋の眼から見ると、一番変わったのは高校生ですね。ひよろひよろ背が高くなったこと——いやそれよりも、本を読まなくなったことです。旧制の高校生は古本屋へ出入するのは当り前で、古本屋漁りと読書の味を知らぬは高校生に非ずと心得ていました。今の高校生は殆どが、うちのような古本屋には無関心で素通りです。ときたま学校帰りの自転車の高校生が、信号待ちしてこつちを見、

「この店なに屋さん？」
「あら、貸本屋さんじゃないの」
なんてやっています。おこる気にもなれません。時代が変わってしまいました。

マンガ屋さんはまだ時流に乗っていますが、かたい本やハード

カバーの多い、種類は何でも扱うよろづや式の在来型古本屋は、地方で今や命数がつきようとしています。
でもいゝと思っています。五十年この商売で食わして頂き、多くのお客さんと人間的なふれあいや交わりを続けさせて頂いたことは、古本屋冥利にあまる有難いことでした。たとえづんづん細りになろうとも、今更やり方変える気もなければ、悔いもありません。以上が老境に足をふみ入れた田舎の一古本屋の感慨です。
(松江市 ダルマ堂主人)

第1回 千葉セントラルプラザ
古本まつり
(千葉県古書籍商業組合協賛)
会期 3月25日(土)～4月2日(日)
10時～7時(最終日6時閉場)
場所 千葉セントラルプラザ
7階大ホール
(最寄り駅…京成千葉中央 JR千葉駅)
事務局 〒277 柏市あけぼの4-4-1 関川ビル1F
このま書房
Tel 0471 (47) 2755



古本屋の戦後

広島・私と古本屋

藤井成一

昭和二十年八月三十日、私は復員して廿日市駅で下車した。

広島駅、横川駅、己斐駅、(何れも広島市内の駅)周辺は幾分焼け残り破壊を免れた建物があった様だがとても下車できる状態では無かった。

一応、田舎に落ち着き、十二月再び広島市に入った時にはもう復興の兆しがあり、各駅の周辺には闇市がひらかれかなりの賑わいであった。その中で古書店は、広島駅では、朝日書房、三國書院、横川駅周辺では、にしや書店外二軒、己斐駅の周辺では、佐々木書店、清水書店、富士書店、外二軒があった。私は翌二十一年三月、己斐駅のマーケットに店を出した。

幸いに、親戚の家に永野護著「敗戦真相記」自由国民社発行

の本が千冊位あった。此れを持ち出して並べたところ、二週間位で売れてしまった。更に親戚より駆け集めた「婦人クラブ」「主婦の友」なども瞬くの間に無くなり、当時の人びとが如何に活字を求めているかを知った。

七月に入ると広島西警察署より、古物商の組合をつくれとの話があり更に八月には広島市内の古書店が広島市商工会議所に集まり、古物商の組合からはなれ「広島県古書籍組合」を結成し、会長に黙平堂書店を選出し一応の形を整えた。この時集まった同業者の数は約七十人、お互いに顔を見合せてその数の多いのに驚いたものだ。

ついで、戦後第一回の市会を九月に開催する事になり取りあえず、黙平堂書店の裏の小屋を会場にした。集まった業者は約二十数名、何れも若く活気のある人達であった。その後、稲荷町の土手下にあった古物商組合の広間を借り数年の間此処を会場

にした。当時国鉄横川駅へ向かう市内電車の終点は別院前電停であった。安佐郡の人々が広島市内に入るには別院前電停まで歩く必要があった。そこで翌二十二年一月、私は横川駅に近い別院前電停の傍に移転した。間口二間、奥行き二間のバラック小屋である。

この頃は哲学書がよく売れ、阿部次郎の「三太郎の日記」・西田幾多郎の「善の研究」等は代表的な物であった。

焼け野が原の広島市の中心地域もぼつぼつ復興し、八丁堀では福屋百貨店を中心に商店街が出来、その中に三國書院、やよい堂書店、アカデミー書店、山陽書店があり、横川の文蔵書店も加わった。本通りでは南海堂書店が二十一年の八月に開店した。千田町では大学前に大学堂書店、千田書店、春秋書房、神川書店、京橋筋にいた澄江堂書店も千田町に移り黒木書店と改名した。

別院前電停の私も二十四年一月には千田町に移転した。又鷹の橋の商店街には拓文堂書店、エイス書房があった。

昭和二十三年の二月ごろ、三

国書院の音頭で即売会をキリンビヤホールの二階で開催した。これが広島に於ける戦後第一回の即売会である。

この年の秋には比治山の多門院を借り戦後第一回の大会を開いた。この市会は黒木さんが、ある医者の蔵書を一括処分する事になり、此れを中心に各組合員の持ち寄りで開催した(一人二万円の責任額)。京都・大阪の業者にも呼びかけたところ皆さんの参加を得、盛大な市になった。

昭和二十四年六月には神川書店に大口の買い物が有り、再び京都、大阪の業者を招き市を開いた。この市で私は英文の塗料便覧を含む化学系洋書一括を落札し、青くなったのである。まったく当てがなくて、たまたま入れた札が高値で私に落ちたのである。約一週間かけて目録を作り、中国塗料、広島大学に買って頂いたときにはホッとしたものだ。

昭和二十三年にたまたま私の店に來られた方に、S先生、I先生、M先生、おられた。S先生は女学校長、I先生は会社社長、M先生は中学校長という人達

で、書物に関して何かと御指導を賜った。

この頃は学制の改革があり、又社会教育の観点からも学校図書館だけでなく図書館、公民館等も圖書の収集に関心が高まって来たときでもあった。

広島でも中学、高等学校では平凡社の大百科事典や全集もの等、基本図書になる物が売れた。しかし一方新刊書の発行が増加し充実するにつれて古書の販路は狭くなり、広島古書店は一軒一軒姿を消して行った。

千田町では昭和二十五年に黒木書店が神戸へ転出し、昭和二十七年に私が現在地吉島に移転し、廃業した人もあって、昭和三十五年頃には大学の町と言われた千田町の古本屋は大学堂書店と鷹野橋から移転したエイス書房だけになった。

私は昭和二十三年から三十五年頃迄経営の重点を中学校、高等学校においた。しかし、広島では品物が少なく昭和三十五年頃までは仕入れの大半を神戸、大阪にたよった。神戸の市会にも度々行き、黒木さんのお世話になったのもこの頃で、ある時公民館より大きな注文をうけ、品

物を集め書類を作成し現物を役場に持ち込み書類と突き合わせるところ、一点「俳諧歳時記五冊揃」が抜けていた。簡単に入手出来ると思いい週間の時間を貰って探すことにした。

しかし、当たってみると広島にはなく、この一点を求めて、宇品から松山、今治と歩き、高松でやっと入手して、岡山を通り広島についたのは夜の十二時を過ぎていた。ありふれた書籍一冊でも、いざ探すとなると並大抵でないことを身に沁みて感じたものである。

この頃から私は、これまでの経営の方針に行き詰まりを感じてきた。

田舎の中学校、公民館等は先に触れた新刊出版物の充実と、地元の新刊書店を優先する傾向もあり、古書店の入り込む余地は無くなって来た。

昭和二十八年の十二月のある日、私は八丁堀の金座街で偶然にもS先生にお会いした。先生は広島大学教授になっておられた。一通りの挨拶の後、昔の教科書を集めるようにと申された。翌年の六月、一抱えの教科書(主に国定教科書)を持って広島大

学教育学部に行き、S先生にお会いした。数学のT先生もこれ図書館の受入とも話し合い、以後は継続納入と言うことになり、此の仕事は昭和四十五年迄続き、その間教科書について勉強もさせて頂いた。

昭和三十二年の秋十一月のある日、大阪、神戸の帰り広島駅で下車し、一休みのつもりで入った喫茶店に一人の男がいた。彼は私の大きな荷物を見てどう思ったのか話しかけてきた。話しているうち私が古本屋であることを知ると面白い話を話してくれた。彼は製紙原料を扱う大きな問屋の番頭で、Fさんと言った。今日岩国に行き先方の問屋の紙を見てきた。其れは和紙で、紙としては高値で売れるが、昔の事が書かれた帳簿だと言う。

私は息を飲んだ。私は彼を説得するのに必死になった。何分初対面である彼がどう出るかは不明だ、しかも現物を見ない中は何とも言えない。其処で翌日、彼と一緒に岩国迄見に行く約束をした。一時間余りバスに乗って岩国につくと、私は何処をどう歩いたのか、ひたすら彼の後に続いて歩き目的の問屋につい

た。ソギふき屋根のバラック小屋に、和紙の固まりが詰め込んであった。其処の主人に聞くと、明治の初め生活に困った武士の授産事業としておこした織物会社「義濟堂」が廃棄した文書であると言う。

私は即座に当時の社会情勢を知る此の貴重な文書を何とかしなければと思った。そしてFさんに、このままの状態では広島へ運んで貰うことにした。(製紙原料を扱う業者は紙の質を選別するため、直ぐに年代を記入した表紙や文書のなかの別の紙をちぎり取りバラバラにしてしま

う) 広島に着いた二トン車一杯のこの文書は、H問屋の二階におさまった。私は早速、県立女子大のお二人の先生にこの文書の話をし、H問屋の二階に案内し現物の文書を見て頂いたのである。女子大としては引き取って貰えず次に広島大学に紹介し、文学部、政経学部、教養学部、図書館共同購入と言う事で納入がきまり、H問屋の二階から広図書館の地下室におさまった。十一月の三十日頃であった。十二月に入ると毎日、大学の図書

館の地下に通い書類を作成し総てを済ませたのは十二月の十日頃であった。

因みにこの文書は「広島大学図書館」義濟堂文庫(二六一七冊)として特別集書になっており、所定の手続きにより一般の閲覧も出来ることである。

(広島大学図書館調べ) この後、私は広島市郊外「緑井村の文書」を県立図書館へ、中山村の兵事に関する資料を広島市の浅野図書館(広島市立中央図書館)へ、山県郡の文書を、広大学校教育学部へ、納入した。其の内「緑井村文書」は広島県立図書館に保管されているようだ。(広島県立図書館調べ)

昭和三十年を過ぎる頃から広島古書店は次第に数を減らし、先に触れた様に、千田町は勿論、中央部は金座街・本通りを含めて三國書院・アカデミー書店・文蔵書店・南海堂書店のみになった。終戦直後、呉市にあった三軒の古書店もいつの間にか姿を消していた。かくて七十軒もあつた広島古書店は七軒に減少したのである。このように寂れた広島古書店は、最早市会を開く力もなく各自自分の城を

守るだけであつた。この頃私は、行政資料に関心を持った。官庁や特定の調査機関の発行する資料は其れなりに価値があると思つた。そこで東京の資料市会に出て資料物に力を入れることにした。

さて、現在広島古書店は三十軒を超し、市会に出席する者も二十名にも及び中々の盛況である。これは一誠堂書店に勤めていた金銅幾雄君が昭和三十九年広島に帰り、努力して広島市会の建て直しを図ったからである。

尚、最後にこの度の大震災で大きな被害を被った黒木さんが災害に屈せず、本の整理や古書の買いに活躍されている由を承り、その不屈の精神に敬意を表し、神戸の皆様にも心からお見舞い申し上げる次第である。

(広島 椿書房)

第2回徳島古本祭

とくしまCITY古書の市

期間 平成7年5月3日(水)

～7日(日) 5日間

営業時間 午前11時～午後8時

7日(日) 午後5時まで

場所 とくしまCITY 5F
シティスタジオ



古本屋の戦後

古本屋はセンス

田中 和隆

一九五五年三月、福岡の現在地で古本屋になった。組合加入金一五〇〇円を渡してアルファベットHのゴム印をもらった。防犯のため奥付に押すものだが、後年組合長さんはなんと愉快な記号をくれたものかと思つた。なじみの古書店に開店の挨拶にいくと客からの突然の変身にびっくりされた。週刊朝日定価三十円が十円、人気のコンサイス英和三八〇円は三〇〇円で売られていた。本誌は一部五十円で一九五二年から購読していた。近くの店の先輩が新米の店をみて一日の売り上げは五〇〇円、と予想してくれたが、本当だった。そんなむづかしい場所が現在は市営地下鉄駅と福岡ドームの近くになり店のまえばざつと二十倍もの通行人がある。

さきの先輩のしりについて交換会にかけ、せどりーではなく店ぬきの味を覚えていった。交換会は地元福岡と小倉で月二回、久留米、大牟田、佐賀、熊本では一回であった。外出のときの持ちものは大風呂敷で、一杯にすると二十キロぐらいになり、菊判の本で三十冊は包むことができる。とはいっても先輩とは大抵がいの細身ゆえ、二十分も歩くと肩にかついだ荷物ごと全身が沈むようである。また、振り分け荷もあつて、この格好は仲間の老いも若きもおなじなのであつた。もちろんそうすることは嫌ではなく、時の一風俗として誰が見ても異様ではなかったらう。その日は店ぬき目的で同業をまわったあとで、お寺や貸会場の交換会に出席した。店にはいるときは先輩より二、三歩はあとにし、物色するのも遠慮から後手にまわって、目のまえで悔しい思いをさせられたものである。

『基本図書時價便覧』（日本古

書通信社編集部編、一九五二年）は最初に手にした初心者には絶好のガイドブックであつた。辞典全集叢書類一二〇〇点が親切な小売値つきで収録されている。流通する古書の基本図書や学術書美術書などは戦前のものも多く、新刊書もいまほど多種で多量ではなかった。古書の勉強は書誌や目録を読んで現物にも接することである。今日のように文化の情報が発達し施設が充実して自由に利用できれば、商品知識の習得は正確で早い。使った書誌は本庄栄治郎、高木慶雄、遠藤元男・下村富士男さんのものなど、目録は一誠堂、明治堂、巖南堂、文学堂、時代や、臨川さんのものだったが、机上の独学に熱中して現物の勉強は留守になったので、知識の習得は遅延として進まなかった。

本誌に載った「古本屋の手帖」「ききめの話時価目録、稀本番付、販売目録は有益であつた。販売目録欄には創業の年に一回、その後十年間には九回掲載させていただいた。そのおかげでお客様の名簿が整つて一九六〇年までに五冊の目録をだすことができた。いまとおなじ人文科学

系で、珍しいものや値が張るものには交換会や同業からのものが多いことに気づく。交換会とセツトの店まわりは初めは単純に仕入れのためであつたが、しだいに店買いや宅買いにはない自由さやさかんな好奇心を満足させてくれることが堪らなくなつて、せつせと励んだ。各地の御同業からたくさん本を分けていただいたが、売り惜しみとかいやな顔をされたことを思い出さないのは幸せである。

はじめのころは気負いから、ひとがやっていないことをやりたくなるものだ。五年目に先輩たちの目を気にしながら電話番号帳に小さな古本売買広告をのせた。誰にも相談せずに市内古本屋地図を作ったのは三年目である。福岡市組合二十名全員の活版一枚刷りで、うれしいことに後に組合が作った組合員一覧表に使用された。そういう積極性が注意を引いたのか、あるいは若い者が必要だったのか、さつそく組合役員になった。そのころは役員全員で交換会の実務もしていたのであつた。役員は二、三年毎に選挙で決まり、とうとう九二年まで三十一年留まつ

て組合の仕事を手伝うことになる。福岡玉屋百貨店の即売会に七八年まで二十年間約八十回休まず参加したことも忘れ難い。会社が古書即売会を文化的催事として認めてくださった。社長さんの九州古陶磁器を集めた公開の田中丸コレクションは有名である。こうして組合と即売会は同時進行して、娘たちの誕生から成長後まで（かみさんの髪色の変化を誘いつつ）日日のくらしのなかに深くはいっていった。

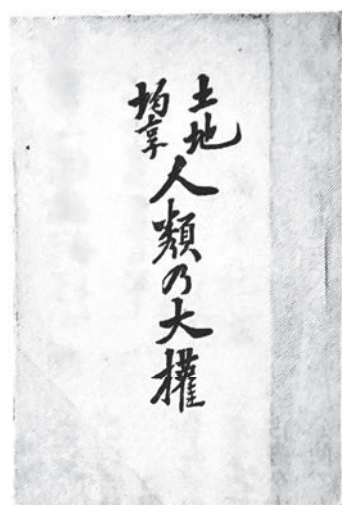
福岡市組合の創立―当時は必要であつたという警察の許可による任意組合の創立は一九三〇年である。組合では戦後一九六〇年に組合史編纂が発意され、のちに年表作成委員会ができた。私は七四年から七六年にかけて催された「戦前を語る会」「戦後十九年の回顧」「元組合員の昔語り」に参加した。敗戦前の組合書類は戦時と郷土の空襲によつて失われたもののようである。そのため座談会の準備は充分ではなく、話題は又聞きをいれた同業の消息にとどまるのも致し方ないことであつた。戦前戦後の資料を求めて警察の古物

担当へ問い合わせたり、図書館で地元新聞を繰って大正末年以降の関連記事を書きとるなどの試みがなされた。ちようどそのころ圧倒的な『東京古書組合五十年史』（一九七四年）が刊行された。私達はこの労作から内容や編集など多くのことを教わりたいと思つた。このような経験から、組合史は小さな努力の積み重ねが必要であることがしだいに理解できるようになった。ところが残念なことに七八年になって、頼みとする古本屋二世〇さんの急死にあい意気消沈して、与えられた仕事がほとんど先へ進まなくなつてしまったのであつた。

一九六八年は明治百年であつた。出版界では前年から江戸・明治・大正・昭和を対象とする明治百年記念出版が活況を呈した。

わが業界では例えば、全国の朝日新聞に西武池袋店による全一段の古書購入広告のせられ、暮れには明治古典会の公開展覧大入札会が開催された。このころからであろうか、明治以後の有名な手紙や原稿など肉筆物の価値が再認識され、人気をよぶようになる。当地でもお客さんやマス・コミから「こんどの古書ブームはどうですか」と好意的にたずねられることがあつた。それには地元を代弁するような調子で、うれしいことではあるがあまり実感はありませんと、と返事をしていた。のちに初版本ブームとよばれた際にも或る戸惑いを感じた。いまでは自分がかもしこの三文字に素直になれて、そして機を見るに敏であつたなら、と思う。

即売会や大市の折りには御同



業が店にみえる。晩年の探書旅行をひとり楽しむ方の姿も幾人かおみかけした。同業は八〇年頃までは多かったようである。私は若いころから同業のどんなお店にも行くかわりに、

同業のどなたがみえても、みんなおなじお客さんと思つてきた。わが家では師走の御同業をサンタさん、とよぶことがある。ただし一般のお客様にとつては、店で業者といつしよになることは即売会とおなじように、あまりいい気持ちではないかもしれない。そうおもつて自分だけは気をつけることにしている。神田の巖南堂・西塚定一さんが店にみえたのは一九七〇年頃であつた。西塚さんは十年ほど前には全連理事長をなさつた社会科学の大家である。緊張しながらお話しをうかがっているうち、自分はキャリアがありませんから、と申し上げると西塚さんは即座に「君、古本屋はキャリアじゃないよ、センスだよ」とおっしゃつたのであつた。この一言は気に入って、いまも、なくてはならないものになっている。一九六八年のことである。市内のある著名なジャーナリストの蔵書を整理することになった。明治文化全集二十四冊そのほか歴史関係を分けてもらった。なかに明治後期の社会主義書が三十五冊あつた。明治二十九年から四十年のものでは片山潜

『鉄道新論』『都市社会主義』『幸徳秋水』『平民主義』『革命奇談』『神愁鬼哭』『田岡嶺雲』『霹靂鞭』『横山源之助』『明治富豪史』『久津見蔵村』『無政府主義』『山口孤剣』『社会主義と婦人』があつて、そのほとんどは故人が出版当時に購入されたものであつた。御子息は別居されて、御父上の本を多く引き継いでおられる読書家である。来店されたり伺つたりしているうち書棚に『土地均享・人類の大権』（宮崎民蔵、明治三十九年二月、東京・新進堂、定価十五銭）を見つけた。この本のことにはなにかで知っていたのでおたずねしたが、手離せないとのこと。ところが、御子息と行き来がなくなつて十年程のちの九二年に幸い蔵書整理のはなしがあつた。しかし、頭から離れることになかつた。裏表紙に斬天生と御父上の記名のある、あの本が見つかからない。やつと探しあてたときは感激して、ありました、と家人に報告したのであつた。そのとき「麵鮑の略取」予約出版に就て（明治四十一年十二月）という平民社の一〇七〇字の一枚刷りが見当たり余白に御父上の書き込みが残されていた。「熊

本評論四十一年六月所載」云云で、このことから当時『熊本評論』を購読されたのではあるまいか、と想像したのである。この地方紙は明治四十年六月から四十一年九月まで、発禁の第三十一号をもつて廃刊となる幸徳派最後の半月刊機関紙であるという。しかし、整理の際には新聞も雑誌もなく、勉強家の蔵書にしては不自然である。実は以前御父上の家で老奥様から、古いものは燃しました、とお聞きしたような気がする。かかねて御子息の奥様が同じことを、今回ははつきりとおっしゃつたことから、貴重な文献のはかない命がようやく悟られるのであつた。『土地均享・人類の大権』は薄い本で厚さは五耗しかない。それだけに新聞などと運命を共にすることなく生きていることが、うれしい。私には推察するしかないのであるが、前記の明治の思想書などは敗戦までのながいあいだ、所有することさえ身の危険をとまなうものであつたようである。これらの本はその誕生のときから、一人の賢い読者に守り通された果報者であるといえるだろう。（福岡・田中書店主



古本屋の戦後

私の戦後・

古書店のこと

旭川市 古書古玩・尚古堂

金坂 吉晃

古書肆・尚古堂という特異な仕掛をした看板をにかけて開店したのは滝川駅前・昭和三十七年の初秋であった。

私の来道は昭和三十年歳晩の某日、尾花うち枯らしたあけく、連絡船から艀を投ずるの勇氣もなく俺は泳げるから駄目だと、渦巻く潮煙に身震いしてデッキから遙かにデスベレートの目をそいでいたとおもう。妻にうながされ彼女の故里岩見沢の駅を下りた。例年ならばすべてあたりは雪の銀世界の筈、駅を下りてみると舗道はガツガツに凍り上って、つるつるの氷の上を歩いているようだった。皆口ぐちに珍らしい年だという。物凄く寒くオーバーの襟を立ていても魔残の軀には骨に沁みこむ寒さだ。妻の案内で一步家に道入

るや急に温くなった。

明日からの生活をどうするか、妻の父は当分眼鼻がつくまで、ここにをればいいと言っではくれているものの、東京を出る時に可成の金子を借りているし、友人からも相当な借金をしている。目下全くのゲル貧といった有様。懐中百円の金の持ち合せもない。明日は職安にいつてみることにした。

年末だというのに朝早くから役所にはもう何人かの列が出来ていた。その列の後についてゆくと列の前には机がおかれ、案内の人がいた。みると某炭坑の下受の組の人らしい。その組の坑内員募集であった。いきなり何番方がいいのか訊かれた。何と言っているのか少しの間解らなかつたが、やっと炭坑のことかと氣付いた。炭坑での仕事らしい。とうてい出来そうもない、ましてその経験もない。その日はすぐに家に帰って妻や両親にこの話をした。あぶなくたこ部屋の人になりそうだった。

昭和三十一年正月、早くに街に出て駅前の通りを歩いていると、平屋建、或る一軒の硝子戸に某生命保険の外務員募集の広告ポスターがはってあった。案内を乞うとこの家の主人が事務所に請じ入れてくれた。

椅子にかける様言はれたので坐っていると、只黙って私をみている。暫らくして保険の外交は若い人などやり手がないが、それでもいいかと言う。正月早々萬策尽きたあけくここに這入ってきたといった。

事務所の壁には勇しい戦争中のポスターの様なスローガンが飾られてある。二三日で仕事の骨を覚える方法は何かと訊ねた。どうやら先方も手筈を感じたらしい。保険勧誘のパンフや様々の資料を持つて来て、よくくく勉強したまえという。パラくくと頁をめくつてみるとそんなに難しいことではないらしい。教科書丸暗記もいいとこだ。自信が湧いてきた。二三日中にもう一度伺うからその折にテストしてくれと頼んだ。では待つてるといふ約束をして帰ろうとすると、封筒に現金六千円を入れてくれた。ただで貰うてい

いのかと言うと、今日から君はうちの社員だと言う。人の情けと今日の幸運に感謝した。二三日経つてから先日支部長宅にゆく。早速、今日から近くの系列の某炭坑に君も一緒に行くと言う。一ヶ月分の定期券も買つてあった。幸運に恵まれたようだ。道々今日は坑長や事務所の課長や主だった炭坑の人々に紹介すると言う。まことに手廻しのよいのに恐れ入った。もう名刺も作つてあった。

事務所では坑長の挨拶のあと、支部長から紹介して貰い、今度新しく本社から転勤したことを言い、保険のことならなんでも相談して欲しい旨、保険の歴史・系列会社のことなど解説つきで一時間口演したあと、坑長始め課長係長等の年佛い保険契約を済ますという手際のように加入手続を手伝つてくれた支部長は生れて始めてだと亢奮している。夜は炭坑の接待館で歓迎会をやってくれるという有難いおまけまであった。どうやら運氣が動いてきたと自覚した。帰りの汽車の中で支部長は自らの生涯の中で貴公の様に二三日で保険のことが解つてしかも

行したりした。

毎日新聞の記者で有名な大森実氏、東京オブザーバーの主宰であったが、ふとしたことから知り合い、滝川青年会議所十周年の記念講演のオブザーバーに大森氏を依頼して欲しいと若い会議所の連中に頼まれて彼を呼んだりしたものだから一時呼び屋の声もかかった。

大森氏は北海道を舞台に外国語を主にする国際大学の理想を持つていて、当時の市長佐久間氏に大学の誘致をよびかけていた。佐久間氏は大森氏の話に吃驚して以後この話はたち消えになった。その後当時の助役であ

った吉岡氏が市長になり、またまた大学誘致が市長の公約となつたため、私にその話が廻つてきて、いろいろと大学の話をしている中に、滝川出身の代々木ゼミのオーナー、高宮氏に話を持つていこう、中学時代の同期生、滝川商工会議所の会長少覚史山氏に頼めばうまくいくよと市長に話し、市長もその氣になつて一緒に高宮氏を訪問、国学院北海道短大が出来た。既に旭川に出ていた私に吉岡市長と滝川の副議長同道の上、御礼に来

勧誘の手口をみると天才的なセールスマンだといって口を極めて賞めた。またたく間に保険会社の扱い方も変化し、すぐに本社の講習会に呼び出され、赤平支部長をやれという。それを一年位やっている中に会社の制度が変わつて支部長は管理職になり内勤扱いになるという。完全にサラリーマンにされそうだと氣付いたので早々に退社を決意し、滝川市に移り古書店をやろうと決心した。

開店はしたものの書棚に本が少いことが氣になつて近所の有力な方を訪ねて古書売つて下さる様たのんでみた。明日は街の古紙屋を見廻り毎日の様に店の主人に頼んで自分で見てよきようなものを選んで目方で買うという方法を数年続けた。何分この古紙屋は滝川を中心にして広く砂川・歌志内・赤平・芦別から集まる古紙屋の大問屋であった。集まる量も毎日車で何台も入るといふ有様であった。幸い老主人に氣に入られて、一寸店の主人に顔を出すだけで思う様に倉庫での振舞いは自由になつてきた。毎日ダンボール函で何個かを仕入させてくれる様にな

たということもあつた。

旭川に移つた翌年昭和四十八年の新春の頃、中年の女性何人かがかたまつて来店した。いろいろな話をしたうちに郷土史の話がでてきた。どうだろう婦人だけ、女性のみを女性史を創つて見ないかと言つた。雑誌も発行しなさい。その手伝いをしてあげると言つた、女性だけの北海道史を創りませんか、申しかけた。それがもう二十五年になるという。雑誌も二十九号を出している。この女性史研究会がよび水になったのか全道的に各地で女性史が生れる様になつた。

旭川に「ちろる亭」とよぶ老舗の喫茶店がある。もう亡くなつてしまつたが、下村保太郎さんといつて全国的な古書マニアがおられ、「情緒」という雑誌も出していた。その下村さんの朝のコーヒーのカウンターで生れたのが、無尽でやる「こまくき叢書」であつた。それを発案したのも私であつた。十五冊位出したとおもう。

次々と戦前からの愛書の連中が亡くなる昨今、全く淋しい限りである。

つた。別に店の倉庫が必要になる様になつてきた。店での仕入はほとんど古紙屋で充分であつた。仕入が安いからそれなりにいい商いになった。

調べるというくと物語があつた。その辺の事情をよく知つてゐる草野心平さんに手紙で問合せたらハガキが来た。

「高村さんが白山上にうられた本は風呂敷一ト包でしたがその中にあなたのいわれる道程がはいつていたのかどうかはわかりません、交渉中私は本棚など見ていたので」とある。

このハガキは勿論高橋さんに進呈した。高橋さんは詩集全部を北海道文学館に寄附されたので、このハガキも一緒に文学館にある筈である。

滝川の生活も長くなって少し有名になつた。ロータリークラブやライオンズクラブのゲストとして呼ばれる様になった。専ら市立図書館建設を話題にして皆さんに呼びかけていた。いい塩梅に教育委員会から来てくれという。図書館計画の相談であつた。

愈々その図書館のオープンの日が来た。私は朝日新聞の昭和十六年十二月九日開戦の翌日の号から三十年間の朝日新聞をまとめて寄贈することにして、市からトラックを出してもらつて納めた。「私は現金三百万円を寄



古本屋の戦後

生きていて

よかった

金森 正雄

昭和二十三年(一九四八)五月二八日、緑の山々に取り囲まれた舞鶴港に入ってきた復員船山澄丸、一千名のシベリヤ抑留復員者の一員として私は帰ってきた。「本当に帰ってきたのだ!生きていてよかった!」の思いとともに「さて実家は、親兄弟は、何処へ帰ったらよいのか」と頭がぐるぐると回り出した。上陸するとすぐ郷里の現況揭示所へ走った。名古屋市街現況地図には、案の定私のいた中央部の栄地区は真っ黒に塗り潰されている。「矢張りそうだったのか。私の帰る所は何処か」一通だけ無料で発信できる電報を、父の生家の岐阜県郡上郡の伯父宛に打った。

想えば、この舞鶴港へ帰った。昭和二十三年(一九四八)五月二八日、緑の山々に取り囲まれた舞鶴港に入ってきた復員船山澄丸、一千名のシベリヤ抑留復員者の一員として私は帰ってきた。「本当に帰ってきたのだ!生きていてよかった!」の思いとともに「さて実家は、親兄弟は、何処へ帰ったらよいのか」と頭がぐるぐると回り出した。上陸するとすぐ郷里の現況揭示所へ走った。名古屋市街現況地図には、案の定私のいた中央部の栄地区は真っ黒に塗り潰されている。「矢張りそうだったのか。私の帰る所は何処か」一通だけ無料で発信できる電報を、父の生家の岐阜県郡上郡の伯父宛に打った。

く迄の五年間、生きていたのが不思議なくらい何度死線を越えてきたことか。

召集されるとすぐ幹部候補生に志願するよう要求された。これを断って東満洲のソ連国境地帯の警備隊に送られた。幹候志願の連中は南方行きで海中に散華したと聞いた。

シベリヤ鉄道の汽車が煙りを吐いて走って行くのが望見される国境の虎林地区は、駐屯していた師団が本土防衛というので帰ってしまい、警備隊などは案山子のようなもので、毎晩国境を挟んで飛びかう赤、青の信号弾はソ連の侵攻が間近いような気が感じられ、いよいよここが死場所だと覚悟をきめていた。二〇年(一九四五)六月二八日警備勤務についていた私は本隊に呼び戻され、七月一日に新京(長春)の関東軍経理学校へ主計下士官教育のため入校するよう命ぜられた。私が商業学校出の経歴によったものであろう。満鉄の車内で、東京空襲で焼け

出されて満洲に疎開してきた一団が「ここは天国だ」と話していたが、その一カ月後どうなったか今でも気にかかる。八月九日ソ連侵攻。経理学校の教育隊は直ちに原隊に復帰となったが、私の原隊は玉砕で帰れない。

原隊復帰できない兵士は新京防衛隊に編入され、私も火炎瓶と急造爆雷を抱えてタコ壺に入り、明日ソ連戦車が来たらこれで一卷の終わりだと、空の星を眺めていた。翌朝、陣地を引き揚げて朝鮮国境の関東軍第二防衛線の通化方面へ集結との命令が出て、経理学校の残留部隊は徒歩で行軍を始めた。

行軍の途中で、八月十五日に終戦になったことを知らされ、武装を解除して『吉林市』に集結する様指令がきた。武器を集めて小学校に格納し、私が監視要員の責任者としてソ連側に引き渡すよう命ぜられたが、私より前任の下士官がいたので責任者を交替して吉林市に出発したが、このあと武器強奪の蜂起があり監視要員は全滅したとの報が伝わった。

シベリヤの收容所での最初の冬は、厳冬と空腹に重労働で犠牲者が続出した。なにしろ三八度以上の熱が出ないと休ませてくれないので辛い日々だった。私も遂にカゼがこじれて発熱し休業になったが薬も無く、隣に寝ている戦友は高熱から脳症を起こしうわ言をいつているがどうしようもない。ところが急にこの收容所が上級機関から検査が実施されることとなり、病人はいないことになっているので、寝ている病人を急拠病院に送り込むこととなった。八人の患者は厳冬のなかを馬そりとトラックを乗り継いで、一日掛かりで病院に着いたときには、四人は死体置き場へ二人は翌日死亡。その内の一人は先に国へ帰ったら安否を留守宅へ知らせようと、互いに住所を暗記しあつた仲だったが、私ともう一人だけが生き残ったのだ。病院といつても一つの寝台に二人頭足交互に寝て、朝起きたら隣の人が死んでいたと言ふような状態で生きていたのが不思議なくらいだった。

田舎の伯父に打った電報に『ミナブジ、ナゴヤへカエレ』と返信がきた。五月三十一日帰還手当七百元を握りしめ、郷里に向かった。途次京都駅で学生援護会で引揚者のお世話をしている妹が出迎えてくれて店の回りの一角が焼け残って家族全員無事である事を聞いた。深夜の名古屋駅には三十名程の人が私を迎えてくれた。

私の店とそれに続く住宅は名古屋の中心部で、斜め向かいの松坂屋を始め周囲は爆弾と焼夷弾で焼け野原となり、わが家にも焼夷弾が屋根を貫いて部屋で破裂したのを消し止めたとかで、焼け痕も生々しく残っていた。父は当時町内会長として責任上踏み止どまって三十戸ばかりのこの一画を残したと聞いた。兄弟姉妹十一人の総領として、必死に家業を残してくれた父母兄弟に対してもこの維持向上に奮進しなければならぬとひしひしと感じた。街を見て歩くと、栄町から鶴舞公園迄に二十数軒あつた書店で同じ場所に残っているのは、松本書店、二昌堂、東文堂、其弘堂、飯島書店、日進堂だけで、栄町角の栄小路には、竹内書店、飛切堂、尾関書店、世界堂が、丸武マーケットには服部書店が、鶴舞公園前には

山星書店、鶴舞書店が出店し、竹中書店、三松堂、大学堂は旧店舗の近くに開店していた。デパートの松坂屋、丸栄にも古書部が出店していた。チェーン店を作った古書売買を大々的に展開している店もあった。

焼けのこった店舗も新規開店した店も、これを維持して行くには、戦後名古屋市の施行した都市計画との闘いであつた。東西、南北に走る百米道路を始め、道路拡張、マーケットの撤廃などで折角開店した店も次々に追いやられて行くような状態になつてきた。

昭和二十三年には、それまで愛知県一円を地域としていた愛知県古書籍商業協同組合は、名古屋、一宮、東三河、西三河の四地区に分立して単一組合を作った。その頃名古屋の市会には各支部毎に開設され、瑞穂、西、中、千種の各支部がそれぞれその地域でお寺などを借りて市会をひらいていたが、地域が分散され又地域差もあつて組合会館の設立が要望されていた。二十五年頃町内の方から松坂屋東の八十坪の土地を三十万円で買ってほしいとの話があり、とりあえず

買い取って組合に提供した。さて資金はもとより都市計画による規制により、容易に家屋を建てる事ができない。その内当分のインフレで半年もたため内に土地価格が倍増し、これを売って家つきの土地を買いおつて来たような有様だった。ここが現在の組合会館の発祥の地である。その後十年間に亘る紆余曲折の末、四十一年に会館は鉄骨スレート葺に建て替えられ、尚今年の組合総会で二階建てに改築することが決議された。

二十三年八月名古屋に於いて全国古書籍商組合連合会の創立総会が開催され「全連」が発足し、二十五年十月「全連」発足の地として第一回全連大会が名古屋市の建中寺に於いて開催され、その後十年毎に名古屋で全連大会が開催されるような慣例になったようだ。その頃名古屋市内の古書店は二百軒あまりで、他に貸本業者があつた。二十五年頃の古書組合員は百七十名で、時勢とともに古書店は暫減し、更に組合会館建設の負担金などで淘汰され約八十名位になったが、若手の台頭によって現在百名を越し次々と新人の入会が続いている。

この間スーパーやデパートの古書展が盛んになり、デパートでは名鉄、三越、松坂屋、丸栄では名鉄、三越、松坂屋、丸栄で始まったが、現在では丸栄、西武春日井店、名鉄神宮前店で毎年一回開催している。その外組合の古書会館で有志書店により年十回位開催されその都度古書目録を発行している。

古書組合創立当時の市会には支部ごとで開催されていたが、その後会員が減つたりして、支部の伝統を保ちながら活気ある市の伝統を加えた五月会、典友会、研究会、中市会、千草会の五つの市会になり、毎週火曜日を市日として凡て入札でそれぞれ特色のある市会を開催している。

三十四年(一九五九)の伊勢湾台風では店の屋根が吹き飛ばされたが、そのおかげで倒壊を免れた。戦争中父が必死で空襲から守ってくれた店は焼け残つたがため、都市計画による道路拡張にかかり建て直さねばならなくなつた。町並みの店舗の一斉ビル化は至難の事業だったが、東京オリンピックの翌年父が喜寿、開店五十周年、金婚式の年、ビルは完成し、それを期に一階

取扱品目

引札 ポスター ちらし 一枚
もの 地図 札 券類 高札 看板
板蓋 版木 容器類 軍隊
の法被 版木 布製品等
戦後のものは扱いません

◎月刊目録発行中

〒530 大阪市北区大淀南
三丁目十番十六号

森里商店



古本屋の戦後

傍流なればこそ

松村 久

私の父は行商や露天から叩き上げた古本屋で、戦前は山口県徳山市の駅前にささやかな店を出していた。私はその店で育った。

父は古本の仕事にコンプレックスを持っていたのか、戦後は新刊屋でスタートした。家内労働に頼る小さな店で、私も手伝っていた。

あの混乱期に父はよく上京し、新刊をリュック一杯さげて帰っていた。もちろんすぐ売れるので、また仕入れにいく。そのころの汽車はいつも超満員で、一昼夜すわれないこともあったらしい。

東販や栗田書店などの取次から送ってくる雑誌を、徳山駅まで取りにいき、多いときは自転車の前後に十五個くらいぶら下

げて帰る。それを整理して市内に配達、集金するのが私の主な役目であった。もちろん店番もしていた。

昭和二十八年、私が広島大学二年のころ、お人好しの父は、こともあろうに、市の都市計画事業で換地をもらいそこねて行き場がなくなり、一年に六回も移転をかさね、店は倒産寸前に追い込まれた。

取次からの送本もたえ、大学どころではなく、徳山駅前で「板に古本を並べ、わびしい店番をしていた私は、ちょうどそのころ全盛期を迎えていた貸本ブームに目をつけたのである。

広島市の貸本市場で買ったマンガを、学生定期券を使って、汽車で三時間の徳山へ毎日のようにこび、「小資本でだれにでもできる貸本屋」というふれこみで、独立した貸本屋をたくさん作っていた。

業者がふえると、こんどは彼らを集めて毎週、貸本屋の市場を開き、広島で安く仕入れた本

を売りさばいた。父は卸部を受け持ち、マツノ書店は山口県の貸本センターのようになり、好調な時期はしばらくつづいた。

まだかなりの借金を抱えていたとはいえず、業者相手に仕事以外にも、店の片隅に自分で貸本部を開くなどして、私はそれなりに充実した日々を過ごしていた。もはや大学へもどる気はなかったけれど、母のたつての希望でもあり、卒業だけはした。

昭和三十四年頃、あまり同業者をふやしすぎて、先にできた貸本屋の反発をかい、ついに私の店はみんなからボイコットされてしまった。

業者相手の商売に限界を感じた私は、自店の貸本部を本格的に経営することにした。通勤、通学者の多い駅前という地の利を最大限に利用し、二十代に焦点をあわせた新しい貸本屋「マツノ読書会」の誕生である。

「朝刊の広告で見た本を、夕方借りることのできる店」をモットーに、井上靖、石坂洋次郎ら人気作家の新作は一点につき二十冊以上も仕入れ、定価の約一割で貸した。子供を来させないため、何年間かは、「マンガのない

貸本屋」としても知られていた。その頃はやっていったソノシートはもろろん、しばらくはレコードの貸し出しまでやっていった。

明るい店、清潔な本、美しい会員証。単行本には貸し出しのつど自家製のカバーをかけ（その頃はまだ新刊屋でもかけてくれなかった）、PR紙を毎月二回も発行した。詩や読書感想文の募集、読書アンケート、バスハイキング、レコードコンサートなども定期的におこない、そしてその後二十数年つづいた月二回の読書グループ「つれづれの会」……。

いま考えると、よくもこれだけの行事を一人で企画、実行していたものだといふのが感心する。珍しい店だったのでマスコミにもよく紹介され、夕方や土曜の午後など店内は若い人たちで超満員。昭和四十五年頃の数年間は、雑誌、マンガを含め、何と年間二十四万冊を貸し出していた。人口十万余の地方都市においてである。

といつても、そろばん片手の商法ではなく、経費を派手に使いたするので、「月末恐怖症」は依然として治らなかった。

貸本屋といえは子供向きと相場がきまつており、図書館もまだ今のような活動をしていない時代。私はこのような店が各地にあれば読書普及に役立つ、という使命感に燃え、「貸本屋革命」を起こすべく、全国の心ある業者に呼び掛けて自分のノウハウを発表していった。

ところが私の店は、身銭を切ったのサービスで成り立っており、簡単にもうかる方法ではなかった上、業界が退潮期を迎えていたこともあって、笛吹けども踊らずに終わってしまった。気付いてみれば、四十にして、私には家なく土地なく貯金もなく、あるのは借金と健康と心意気だけ。これが「貸本屋革命」を夢見ていた男のたどりついた厳しい現実であった。

昭和四十八年、飛躍を求めて現在の場所へ進出してきた。県内で最も地価の高い「銀座通り」で、家賃、人通りとも、それまでの数倍にはね上がった。

それなのに、肝心の貸本部はますます伸び悩んできた。貸本は借りるだけでなく返しにこないければならないため、どんなにサービスしても遠くの者は利用

しない。これは貸本屋の地理的限界であった。

逆に、併設した古本部の利用者はうなぎ登りにふえてきた。繁華街では、通勤、通学者よりも、いわゆるフリのお客の方が多いからである。

ベストセラーの仕入れに奔走し、未返本の請求に神経を費やし、毎日の成績に一喜一憂していた貸本屋にくらべ、古本屋の仕事はまことに単純であった。宣伝さえすれば仕入れはあり、本に値段をつけて店に並べておけば、いつのまにか売れていく。

残った本は、どこかの市場へ売ればそれでよい。貸本屋とちがって前途への不安はいささかもない。まさに天国的な商売であった。

こうして二十年続けた貸本屋をやめ、ようやく古本屋になったのである。

さて古本屋をはじめたが、田舎のことでもあり、扱う本は限られていた。それで、特色を持たせるため「山口県史料」の収集をはじめた。クルマの免許をとって県内を駆け回り、県外の古本屋や市場へもひんぱんにでかけた。

貸本屋でいら立ったことの一つは、せっかく読者を開拓しても、その需要を満たすだけの本が出版されないことであった。たとえばそのころ、高校生向きの小説はいくらあっても足りないのに、刊行されるのは月にわずか四、五点である。時代小説も然り。貸本屋という読書生活の最前線における需要に出版社が応じるのは、いつも数年後になるのであった。

同じように古本屋でも、お客の求めている本はなかなか現われない。たまにあつても、高価で研究者には手の出ないことが多い。どうしても需要に応じようとすれば、自分でその本を作る以外にないということがわかってきた。

それで、ある種のサービス精神から出版をはじめたわけであるが、これはまた大変な仕事で、貸本屋以上に手間と根気を要するの、貸本屋の安全性はなく、一歩間違えれば何百万円の赤字になるのだ。

ところが出版には、貸本屋で歯がみをしてきたような地理的限界はなく、また東京の出版社へ依存しなくても、自分の努力

でお客の欲する本を作ることができる、という大きな魅力があった。

こうして古本と出版の「二足のわらじ」が始まり、現在に至っている。

戦後混乱期の十年、貸本屋を二十年、そして古本と出版を二十年。考えてみれば、私の「戦後史」は同時に自分の「仕事史」でもある。でもそれは古書の王道ひとすじの人に比べれば、道草を食いつながら山路をさまよってきたようなものだ。

しかし、道草にも効用はある。貸本屋時代の名残が、私の店は庶民的で入りやすい。店番も買い入れも、ずっと女性パート任せである。

パートといつても、みなキャリアは相当なもので、私よりはるかに目がこえていく。おかげで女性客の方が多い。地域に密着した明るい店は時代を先取りしていたらしく、ブック・オフなど他業種からのチェーン店に足をすくわれることもない。

出版の効用も大きい。これまで百三十点あまりを出版してきた。そのうち半数以上は復刻である。

稀覯本を復刻すれば、古書価の何分の一で、しかも何百人もお客に喜んでもらえる。またやがてはそれらの本が、自家蔵の古書目録をにぎわすようにもなる。収穫をあげながら自分の領地に植林をしていくようなものである。

扱い商品の多様化、業種や業態の枠を超えた大型複合店の進出など、これから始まるボーダレスの時代を古本屋が生き抜くには「専門化」しかない。自分でオリジナル商品を生み出すことができる出版は、そのための強力な武器の一つだと思ふ。

今春、私の息子はコンピュータの畠から古本屋へ転向してきた。いま私は店を息子にまかせ、「山口県史料」の目録販売と復刻出版に専念している。

戦後五十年。

本不足から本余りの時代へ、活字からマンガへ、マルチメディア化、他業種からの進出など、風雲は急を告げている。古書業界だけでは足りない。日本中がいま戦国時代、明治維新をものぐ大きな曲がり角に立っているようだ。

この稿を書きながら私は、生前とてもお世話になった民俗学者の宮本常一先生から「主流になつてはいけな、傍流なればこそ、よく見えることもある」と何度も言われたことを思い出している。

この五十年間の「道草」をエネルギー源に、「傍流」「個性」「零細」をキーワードとして、私は今後の二十年を生き抜きたい。

(徳山市・マツノ書店)

串田 孫一著
関根寿雄版画

『山旅と珈琲』
書下し限定100部

著者署名・版画手彩色4葉入
B6判上製2重箱・活版印刷
定価15,000円(税込) 千400円
9月30日発行・申込先着順。

〒169 東京都新宿区
高田馬場1-16-11
(株) いなほ書房
電話・FAX 03-3209-7692

地方古書店の 生きる道

中川 英治

私の父は大正三年東京生まれ、旧制中学を出てすぐに白山の窪川書店に勤めた。何か特別な知り合いとかではなくて、通った京北中学に最も近い古書店が窪川書店であつたという。もちろん古本屋になろうと言うのだから少しは文学少年だったのかもしれない。その点では窪川書店は父の好奇心を大いに満足させてくれたと思う。「古本の花」という戦前の古書業界でも特に注目を集めていた窪川書店の目録の編集を新人店員の父も任されて、それがずいぶん勉強になったらしい。もう、六十年も昔の話を目を輝かして父は私によく言った。

しかし、両親がいなかった父は長く修業するわけにもいかず二年目には大塚に小さな店を構えた。その店は売り上げも良く、早く結婚した私の両親の生活を支えるには十分だったらしい。

龍文堂書店は洋本だけで、主と

古本屋の戦後

昭和十六年に戦争が始まって父はずっと大塚で店を開いていたが、昭和二十年の東京大空襲で被災して、母の実家がある水戸に疎開した。

戦争中、水戸学で一世を風靡した水戸は県庁があるとはいえ北関東の小さな地方都市だった。そんな町にも、昭和二十年八月二日B29は百六十機もの大編隊でやってきて市街地の大部分を焼失させた。父は、東京と水戸と二度も空襲にあったのである。

父は終戦直後、水戸駅前で本場に小さな店を始めた。それはほとんど露店に近いようなものだったという。

そのころ、水戸には繁華街の南町に龍文堂書店、大工町に高柳書店の二軒があつた。県庁所在地にたつた三軒の古書店しかなかったのかとよく聞かれるが、昭和二十五年の水戸市の人口はわずかに六万五千人だったのだからまあ適正な数と言えるのではないだろうか。水戸市は実際の市勢よりも、ずっと大きな町に見られるがそれは水戸黄門の印籠のおかげだと思ふ。

して白っぽいものが多かったという。高柳書店は和本の自筆本なども商っていた。どちらもういゆる老舗というわけでもなく、一代目で戦前に開店してそのころはもう老境だった。水戸の古書店で長く続いた店はほとんどない。江戸時代の書店は明治時代には全て廃業していた。

父の店はいわゆる新参者だったから閉鎖的な水戸の町で、母が水戸の生まれとはいえ最初のうちは相当に苦労したらしい。終戦直後はどんな本でも売れたとよく言われるが、水戸に最も多かった水戸学の本はいくらなんでも敬遠されて、ほとんど売れなかったという。その上、空襲で市街地のほとんどを焼失したから、終戦直後のお屋敷からの買い入れなどもなかった。家族を抱えて途方に暮れるような状態だったのではないかと思ふ。

そのなかでも、よく売れたものは小説本に雑誌などであつたが今と違って参考書、理工学書もよく出たという。青木正美さんが書かれているように、水戸も東京の下町もあまり変わりはないかと思ふ。父の店でも今珍重されている漫画雑誌やその付録など山と積んであつて、それでも売れないものだからその雑誌で風呂を沸かして

いる始末だった。今振り返るとよく火事にならなかつたと思ふし、何百万円も灰にしたような気がする。漫画の付録を青木さんは釘で打ちつけて束にして売ったとお書きになつておられるが、父は五冊あるいは十冊を糊付けして売っていた。ずいぶんそのようにして売ったのに、それをついぞ見たことがない、もうすっかり消滅しているのだろうか。

北関東の片田舎でもたまにはいい買い物もあつて、父の記憶をたどると、北茨城市にある野口雨情の生家の近所の家から、野口雨情宛の署名本を大量に買ったことがあつた。白秋はじめ錚々たる詩人、歌人達の署名本で保存も良かった。父はしばらくその本を持っていたが、道楽息子の子のために売ってしまった。今でも極稀に市場でそのときの本を見かけることがあるが、少し胸が痛くなる。

そのころ、水戸の古書店は龍文堂書店、高柳書店の二軒とも閉店して父の店一軒だけになっていたが、やがて大工町に寺内書店が開店した。元新聞記者の知識人で店にもその同僚達や教師などが出入りして相当繁昌していたという。水戸に二軒の古書店しかない昭和三十年頃茨城県内でも下館に山口屋書店、土浦に井出本屋、日立に佐藤書店だけであつた。昭和二

れてくれば、市場に出品できない父には実に有り難い人たちだった。

このように書いてみると、さも買い入れが多かつたように思われるが実際は大したことがなかった。地方では、古書を買うお客様はいても売ってお客様は極端に少ない。体面を気にする人たちがあまりに多いのである。「夜中に来てほしい」と言う要望なのでその通りにするとそのお客は門から通りを覗いて「今だ、急いで運んで早く帰ってくれ」と、父に叫んだという。

それでも偶にはいい話もあつて昭和三十年代の後半、国会図書館などに自筆史料が多く所蔵されて

いる小宮山楓軒の旧蔵文書をお客様が持参した。水戸藩の学者の自筆書簡や自筆本などようやく売れるようになった水戸関係のものでもとびきり良い口といえる。なかには、徳川斉昭の異国船を描いた絵(写真)、大津浜に上陸した英国船を描いた巻物などもあつた。

そのとき購入してくれた方が、後年私に小宮山楓軒の自筆本はともかく安くて見たときにふるえた話をしたが、それは父もよく覚えていて「でも、あの本は一年以上もガラスケースでほこりを被つていたのだ」という。今のよう博物館もなくまだまだ安い時代だったのかもしれない。

その後茨城県立図書館郷土資料

室長のI氏がほとんど毎日のように来店なされて精力的に茨城県地方史文献を購入された。それは、まるで個人の収集のようで何かにとりつかれたようにみえた。I氏のその努力によつて茨城県立図書館の郷土資料は質も量も他県に誇れると思ふ。

また、彰考館のF館長も得意様の一人で水戸徳川家に関する文献などを購入された。その上、F館長は彰考館蔵の国文学書の翻刻出版版に関して積極的に許可を出し国文学研究者に今も感謝されている。

そのうちに、博物館のなかった茨城県にもようやく茨城県歴史館が建設され郷土資料を大量に購入してくれるようになる。それは、かえって圧倒的な品不足を引き起こすのだが、戦後から売れない郷土資料を収集し保管していた父には、その資料がようやく日の目を見ることのできる誇らしさがあったと思ふ。

昭和四十年代も茨城県内は古書店が増えなかつた。昭和四十七年私は神田の高山本店での修業(と言えるかどうか)を終えて水戸に戻りそれを機会に、父から独立して店を持った。そうして組合を作った。日立の佐藤さんと父と私とたつた三軒だったが念願の組合と言えた。全国でもかなり遅い組合

の結成である。その組合が、現在は三十余名と増えている。二十年ちよつとで十倍の成長である。でもそのほとんどが茨城県南部に所在しているの、水戸から北はやや少ないと思う。水戸の現状は組合員が三軒、非組合員が七軒、今夏、最近流行のブックオフが大店舗で開店しその他にまだ出店計画があるというので一気に戦国時代に突入したような感じがする。

地方都市(地方の大都市は除く)の古書店の生きる道は昔も今も険しい。ずっと以前から古書店の専門店化が叫ばれているが、ほんの少数の店で成功しているに過ぎず地方都市では何でも扱わねばならない。私の店も十数年前移転した折り漫画、文庫、新書、雑誌などをやめて郷土史、歴史、美術、仏教、文学だけを扱って開店してみたが無惨な結果に終わった。

その点、古書目録だけは少しは特色を出す事が出来る。私も各地の地方都市の古書店と同じように郷土史の目録を作っている。それは父が手がけた分野だったから最初から順調にスタートし、十五年続けることが出来た。そこで、最近一般書の目録も出し始めたがこちらは今だ苦戦中である。

古書に限らず美術でも郷土作家の作品が最も売れるのはなぜだろうか。身近な作家ということだけ

十五年頃まで営業していた土浦の興文堂書店はすでに廃業していた。古書が売れない時代が来て、水戸の寺内書店、土浦の井出本屋も相次いでやめてしまった。この井出本屋は廃業直前に土浦藩の藩主土屋家の倉の整理を依頼され、いま茨城県立図書館が所蔵している徳川斉昭自筆の土屋家宛書簡三十余通などを買い入れたという。これで、県内の古書店は栃木県組合に所属していた山口屋書店を除くと二軒だけになり、当然組合など成り立つわけもなく、神田の市場との交流も全くない状態だった。

そのかわり、セドリ屋さんはほとんど毎週のように誰かが訪れ父が買い入れた本を買ってくれた。特によく来てくれたのは東京の亀有にいた橋本さんだった。また、戦後の一時期は東京の古書店の主人が地方廻りをしていたのだから、福岡の田中さんとも書いておられた巖南堂さんなども父の店を訪

なのだろうか。単なる郷土愛の発露なのだろうか。水戸では、横山大観は売れるが川合玉堂は売れず、中村彝は売れるが梅原龍三郎は売れず、板谷波山は売れるが加藤唐九郎は売れない。郷土愛が極めて旺盛な地域なのだろうか。

だから、地方ものを扱わないで成功している古書店をいつも尊敬している。その域に少しでも近づきたいと思っている。

父子二代にわたつて地方で生きている古本屋の取り留めのない話を長々と続けてしまったが、父の体験は父が去る六月十一日に逝去したため改めて聞くことが出来ず、私が子供の頃から聞いてきたことを思い出しながら記したので、曖昧な点が多いことをお許し下さい。(父中川真一朗への生前のご厚誼に感謝いたします)

(水戸市とらや書店)

洋書 探求致します!!

古書・絶版書・専門書・一般書
その他、日本では見付け難い洋書をお探しの方々のために国外で探求致します

探求費無料

ご連絡はお電話番号明記の上郵便かFAXで

〒370-28 群馬県甘楽郡南牧村
星尾1290

星尾ブックシェルフ
FAX 0274-87-3128

「趣味品目録」

第5号...残部僅少

引札・ポスター・カタログなどの
広告資料、絵葉書、観光案内、地
図、版画、煙草空箱、映画演劇の
ちらし、パンフレット、雑誌、書
籍その他昔懐かしい趣味品全般

◎目録ご希望の方は、収集分野を
ご記入のうえ葉書またはFAX
でお申し込み下さい。(無料)

〒426 静岡県藤枝市瀬古1-14-11

ノスタルジア

FAX 054-646-1836

古本屋の戦後

古本屋の中で

荻部 正

序

私の古本屋歴は語るほどのものはない。「天保堂」の軌道の上に乘って走って来たに過ぎない。機関車があまりにも大きかったので連結器が切れないようにと走りつづる。

創業者、天保堂篠田亮一は明治十四年、信州飯田の生れ。そのスタートは「東京古書組合五十年史」に、日本橋通三丁目の「後淵閣」とある。

明治三十三年創業。

その営業地は、明治四十年版「全国古書名簿」に神田区裏神保町、又、「神田書籍商同志会史」(昭和十二年刊)に、同志会発足時明治四十三年に通神保町とある。

横浜野毛坂の現在地には大正五年春に移店。昭和十七年十月十七日没。

その後、未亡人かねは昭和二十年三月疎開閉店まで。

三代 荻部洋吉 昭和二十一年

五月(五十八年)。

四代 荻部正 昭和三十六年五月より現在。「天保堂」の看板は九十五年、生き続けている。

一

この六月の初め、私は旧制中学時代からの友人に誘われて、山陽路をその仲間達と廻った。出発予定が仲間の一人の都合で丁度一週間遅れた。その日程の後半の一日、周防灘沿ひを山陽本線で西へ。

その車中で、私は仲間のFに「小郡駅」の話をした。

丁度、九十年前のこの日――

若い古本屋三人が九州までセドリに行く。その三人は、巖松堂波多野重太郎(別氏)、玉英堂齊藤英一郎(別氏)、天保堂篠田亮一(別氏)である。

――各々、四百円の金を捨てるのですが、巖松堂さんもその金を

工面するのには少々困難なようでした。それで品物を賣つて捻出することになり、私も品を市へ出す手

伝に行きました。夜汽車、夜汽車

とかけて行きました。岡山から廣

島、山口と廻つて九州まで行きましたが九州では東京から洋本を買ひに來たのは始めてだと大歓迎を受けました。(中略)

帰京して松本市で市をして大変な出来高だと褒められました。私

が洋書の係、篠田が原書、巖松堂さんが洋本という分擔で私が二、三歳の時でした。

―― 齊藤英一郎氏(秋の宵 第一支部古老座談会)より

――そうそう、日本海大海戦を小郡の駅前の交番の掲示で知ったのを覚えてるから三十八年(一九〇五)の五月です。

―― 波多野重太郎氏

(巖松堂の歴史を語る)より
後年、その戦勝を祝つて海軍記念日とされたのが、五月二十七日。(筆者注)

以上の話は私が「神奈川古書組合三十五年史」(一九九二年十月刊)に東京組合機関誌「古書月報」にお世話になって書き写した天保堂の草創期の部分である。

遠い昔の話ではあるが、私の今回の旅の当初の日程だと奇しくもこの五月二十七日に「小郡駅」通過と云う偶然が、私の幼年期の天保堂篠田亮一への忘れられぬ温もりとして、車窓の外にその面影を追ひ求めていたのだった。爺さんは戦勝気分をいだきながらの中で、車窓の景色をどんな気持ちで見ていたのだろうか?

その風景は九十年の隔たりはあるだろうが駅前のその交番こそ違え、見渡せる山々の爽やかな樹木の緑は変りないものと思う。

只、この九州セドリ旅の話は私の切符を買つて私に渡す。爺さんは櫻木町からの定期券を持っていた、勿論私はタダだから、その切符は大きな木箱に私の宝物として「講談社の絵本」とともに、小さな勉強机にヒミツの箱として鎮座ましましていく。

神田のクラブゆきは私の国民学校四年生、爺さんが亡くなった年の春頃まで続く。

三

敗戦後の昭和二十一年五月、天保堂は私の長兄洋吉が復員、大学へ復学してT大在学中に復活する。敗戦後の横浜は駐留軍のカマボコ兵舎から飛行場まで、街全体が接収され、唯一の商域として市と第八軍の政策で、野毛町一帯が日本人用に指定され、青空マーケットと云えば聞こえは良いが、完全なブラックマーケット闇市が設置された。野毛へ来れば金さえあれば食べものはあった。大袈裟に云えば、横浜中の人達が物を賣りに、物を買ひに來た。

その中で商品とする本は洋吉の学生時代の蔵書の一部を床下の土中に埋めたもの、防空壕に入れて焼かず済んだもの、学徒兵としての海軍士官で在任した横須賀の将校用の自室と施設に持込んで残したものだ。

間口二間、奥行三間の簡易住宅の入口の土間、一間四方の書棚には勿論、商品は足りない。そこで

が洋書の係、篠田が原書、巖松堂さんが洋本という分擔で私が二、三歳の時でした。

は読んでそのスケールの大きさと根性を痛感していた。

年号が改つて大正二年。二月二十日、神田の大火が街を一変する。

その七月二十九日、神田高等女学校教頭の岩波茂雄が教職を辞して古本屋としてのスタートをする。

この時、篠田は弟之森と本郷志久本亭の「九の日の市」に岩波と同道する。市での荷を大八車に積んで三人は帰つて来る。そして

開店する古本屋「岩波書店」の看板を篠田は岩波に頼まれてその店先で書いたと云う。

この話は私が、婆さんに何度も聞かされていた話である。

その書は筆書き山帳時代の数少い達筆であつたと云われ、永坂石埭(筆者は「古書月報」に石泰と記されていて、前述「神奈川古書組合三十五年史」にそのまま誤記している)を学んだもの。

石埭(一八四五―一九二四)は医学大学に奉職し、後、神田松ヶ枝町に診療所を開き、詩を好み、又書を善くした。其の書古厚にして雅緻あり、書籍の題簽より、看板にまで至る。(奥山錦洞著「日本書道史」東京清教社 昭和十八年刊)とある。

その石埭流の書の看板がどんな看板であつたかは、今は誰にも分からない。「岩波書店」の看板はその後、安倍能成が漱石に委ねて書かれているが、その看板も関東大

つた装幀の「漱石全集」。

五部が十部しかないこれらの文庫は、それこそ羽が生えた如く、一瞬にして売り切れた。

年が明けると、本拠地を接収されて本牧で仮営業をしていた有隣堂が野毛に店舗を探したいと社長自ら尋ねて来る。

初代天保堂がお世話になった縁で、祖父が焼け跡になった儘の家

作のあと地を倉庫兼従業員宿舎に、県道に面した市電の通る一等地に店舗を紹介し、それから十年有隣堂は野毛へ讀書人を呼び込む。この延長は昭和二十七年九月に、江川理事長の発案で、組合員十二、三名からなる青空マーケット「野毛坂ブックセンター」が、リング箱の上に戸板をのせて、野毛坂に出現する。

しかし、その冬、次の夏、二度目の冬となると、一軒のみの「ブックセンター」になつていた。これは単に暑さ寒さだけでなく、関西のネオ書房チェーンの保証金なしの新刊貸本と云う新方式に飲み込まれたのも一因である。

江川理事長と関西へ調査に行つた兄は四ヶ月後に、戦前の天保堂の部分を半分、貸本「かるべ文庫」として併商する。

そして貸本ブームは県単位の組織まで作る勢ひで、テレビ出現まで続く。

四

震災で消失している。

この神田の大火のあとの大正五年春、篠田は神田から横浜野毛坂へ転出している。転出の理由は分からないが、古本屋に足を踏み入れた「後淵閣」時代に横浜を見ていたのかも知れない。

新聞の古本買入広告の先駆者として「後淵閣」の主人、小池繪更氏は「横浜貿易新聞」に明治十七年四月と同一二十一年三月の二度、「和漢洋書買入」広告を掲載している。小池氏が横浜に目を向けていた事実が篠田の決断に繋がっていたと思われる。

しかし、その営業の土俵は常に神田にあつた。前記、九州セドリ旅の頃から、松本亭の「七の日の市」、同志会前の青志会々長としての松本亭の「二十日の市」、本郷志久本亭(本郷での初市会)「三の日の市」等の会主として二十才台の若さで華々しく活躍していた。

横浜へ移つて、大正十三年九月、関東大震災のあとの復興期に篠田は横浜古書組合設立を呼びかけ、次の年に組合を創立している。

そして昭和に改号されると、松本亭に京浜連合市を開催、その同人と伊勢佐木町有隣堂で展覧会(即売会)を不定期に始め、同十年末に、有隣堂古書部の運営を任せられながら、東京書林常市会、和楽会、第一倶楽部市会(後の東京図書倶楽部交換会)、東京古典会

昭和二十八年、丸山眞男ゼミに在籍し、T大大学院生として在校十年の兄は自動的に卒業し、同時に学生古本屋も卒業した。そして旧制高校時代の恩師、安倍能成先生の「一本会」にのめり込み、先生に書いて戴いた看板「天保堂荻部書店」を店頭にぶら下げると、真正正銘の古本屋になる。

五

私は大学を出ると新聞屋勤めになるが、兄が健康を害し、昭和三十六年春、幼友達が「家に帰れ、家を継ぐべきだ」と野毛の地の一等地(天保堂と百米離れた処)を貸してくれる。まだ世帯も持っていなかったのに、何も悩むこともなく、スムーズに私は天保堂の懐に帰る。両親は健在だったので、その友人の店を「第二天保堂荻部書店」として開店。

その時、業界の先輩S氏は、「荻部君はいい、古本屋は二十年修業してはじめて認められるんだって。その点君は古本屋の中で育っているから、その半分で古本屋に成りきれでせう。あの天保堂さんもお墓の下できつと喜ばれるよ」

篠田亮一が鬼籍に入った年令を私は越えて了つた。そして自身身の年令の半分よりも古本屋稼業で続けている。

(横浜 天保堂荻部書店)

古本屋の戦後

「タンポポ書店」の場合

片岡 千歳

「タンポポ書店」は昭和38年創業です。古本屋の戦後——というこのシリーズからはピンとがずれていることをお断りしておきます。

夫はさまざまな仕事の遍歴のすえ、生活の安定を考えて警察官になりました。そのころ私たちは結婚しましたが、警察官になりきれなくて辞めてしまいました。

「暮しの手帖」で、自転車で立場まわりをする古本屋さんの記事を読んでヒントを得た夫は、古本屋を開業することにしました。昭和38年5月のことです。資本は、三千万円で買った中古の自転車と、自分たちのささやかな蔵書、立場まわりの資金三千万円、それとにより二十七歳という若さでした。

場所は国鉄高知駅から二つ駅西にある旭駅の近くに実家があり、一部が店舗で、そこで叔父が骨董

屋をしておりました。古い家具や大きな瓶、土佐の皿鉢料理に使う大小様々の皿鉢などが並ぶ店の端に、半間の本立てを置き手持ちの本を並べました。その前二三日旭駅前で、木箱の上に戸板を置き古本を並べてみたけれど、通る人に見向きもされず、止めてしまいました。けれども夫が本気で古本屋を自分の仕事にしようという固い意思をその時に感じました。

旭駅前通りに四坪の貸し店舗を見つけて、そこを借りることにしました。屋根の上にトタンを張りつけた看板があって、塗料を買ってきて、夫が自分で「タンポポ書店」の看板を書きました。長女が二歳になっていて、親子三人の生活は食べるのがやっとでした。本棚も、お金が出来たら材料を買って夫の手作りで、ひとつづつ増やしていきました。夏の暑い日、リヤカーに往きは娘と私が乗り、帰りは板材の間に娘を乗せて、夫のひくリヤカーを私が押して来たことでした。ざっとした仕事のことをハナクソアンドン（鼻くそで行灯を貼る）と言う言葉が土佐にありますが、夫の手作りの本棚は、仕上

りは早い、まさにハナクソアンドンでした。

「本屋をたたむとき楽でいい」などと自嘲していましたが、大工さんに頼んだりすることも出来ない経済状態でした。ひとつひとつ作るうちに勘どころを会得したものが、三十年たった現在もその本棚を使っています。二三年前デパートから撤退する書店さんから「本棚を差し上げます」というありがたいお話がありましたが、創業のときの思いもあって辞退したことでした。

私たちは詩を書いていて出会ったのでした。商売はズブの素人です。詩書を沢山集めて渋谷の中村書店のような古本屋を目指していました。二十代の初めの中村書店で「左川ちか詩集を尋ねたら、細身の黒シャツの店主が、たちどころに裏から出して買わせて頂いた、あの時の感動が忘れられなくて、詩書を専門にした古本屋を夢見たのです。

詩書は売れないことをまもなく知ることになりました。でも意外に高く売れることも知りました。夫が立場で見つけた「萩原恭次郎詩集」をなるべく長く手元に置きたくて、自分たちとしては法外な値を付けたつもりが、一週間もしないうちに売れてしまいました。

珍しい、いいものはこんなちっぽけな店でも売れるという、商売の面白さをこの時覚えたと思います。

旭駅の北のほうに、高校野球で有名な高知高校があり、学生が参考書売り場にきます。新刊書同様にきれいなので安ければ売れると思いついぶん買いました。たまに売れましたが、買うのは先生とおぼしき大人ばかり、学生は売り方専門なので、在庫は山と残り、参考書は買わないことにしました。

今は車でどきどきと売りにくるお客様がほとんどですが、その頃は手で提げられるだけ持ってこれるのが普通でした。僅かなお金で売り買ひするのですから、大きな包みを提げて店に入ってからはお客様を見たら、私は近くの姑の家にお金を借りによく走ったものでした。

その頃四国地区では年一度だけ市がありました。お金がないので、なかなか出掛けることができませんでした。夫は蔵書家の友人に頼んで委託販売をさせてもらいました。持ち主に売値を付けてもらい売れた時に二割こちらが頂くというやりかたです。友人に恵まれてずいぶん助けていただきました。

旭駅前通りでは三年やりました。高知市の中心地に老舗の井上

金沢書友会

第三回共同目録 十一月下旬発行

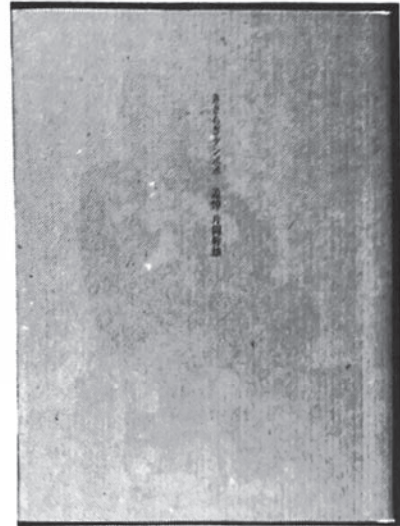
A5判約50頁二五〇〇点掲載。
御希望の方は90円切手同封の上
左記までお申込み下さい。

〒900 金沢市安江町一十一
近八書房内 金沢書友会

書店がありますが、そこから電車を隔てたところに貸し店舗を見つけて移りました。家賃は前のところの三倍でした。でも売上もそれに添ったもので、素人商人の私たちはヘンに感心したことでした。家賃が大きくなると、諸経費も多くなり、家族が増えたり生活はなかなか楽になりません。月末になると井上書店に本を持っていったのは家賃を拵えたことでした。

運送業界にいた親類のものが、声を掛けてくれて夫はトラックの運転手のアルバイトをはじめました。その間店は私ひとりです。夫は十年余り履くことになりました。

「タンポポ書店」の店名は、W・ボルヒェルトの詩句から夫が付けました。この中心地に来てお客様も増えて軌道に乗ってきた感じでした。綿毛になってふわふわと飛



平成5年2月刊「きさらぎタンポポ」
—追悼片岡幹雄—

来年の古書展の準備が始まりました。広く明るいきれいな方式の古本屋が、高知にもいくつかあるようです。近くのお店を見せてもらいました。が、キャッチフレーズどおり広

く明るいきれいで新刊書店のようでした。値段は一概に安いとは言いがたいと思いました。広くて量が多い所にお客様が流れるのは当然の現象かとも思いました。せっかく来たので一冊でも買いたいと探しましたが、買いたいと思う本がありませんでした。こうした方式の店舗を歓迎されるお客様が多いように思いますが、物足りなく感じのお客様も少なくないと思います。

平成四年夫は亡くなりました。私には三人の子供がいますが「タンポポ書店」は四人目の子供のようなものです。幸い子供たちは成人していましたが、それぞれ道があつて店は私一人に残されました。本の買い方、補修の仕方それから諸々夫のやり方をなぞって、一日でも長くこの店を続けたいと思います。

沢山の友人が心を寄せてくださって、追悼集「きさらぎタンポポ」ができました。いつの日か出版も手掛けたい思いを抱きながら、ついに果たせなかった夫の思いを込めて、彼の手作りの看板を「きさらぎタンポポ」の奥付けに使いました。

新刊も古本も溢れている昨今の状態です。それが本の探求を一層困難にしているとも思います。多



Maggs Bros. Ltd.
Rare Books

autographs, manuscripts
and miniatures

イギリスで150年の歴史と伝統を誇る王室御用達の古書専門店
英文学、自然科学史から旅行関係まで幅広いジャンルに渡って豊富な取り揃え

50 Berkeley Square London W1X 6EL
Tel: (0044) 171 493 7160
Fax: (0044) 171 499 2007
日本語担当: タイタス ボーダー

古本屋の戦後

復帰以降の古書 業界と緑林堂書店

武石 和実

沖縄における古書店の歴史がいつから始まるのか定かではない。戦前にもあった様だがはつきりとした資料はない。古本屋どころか書籍の流通の全体がもうひとつよくわからないのである。

本土復帰以前の沖縄は、書籍の流通は政治的経済的な制限を受け、人々は皆、書物に飢えていた様である。価格も割増加算され、市場に流れている本の絶対量そのものが少ないわけだから、古本屋が商売として成立すべくもなく、幾つかの店ができたが皆短命であったという。古本屋がひとつの業界として安定して成立していくのは、復帰後の政治的経済的混乱がひとまずおさまった80年代に入ってからである。

私が沖縄の住人となったのは復帰の年の事である。この頃、

と「本」と名のつくものは何でも飛ぶ様に売れたとの事である。私自身その客の一人であった。

これに刺激されて、労組や市民団体が主催しての古書の展示即売会が、運動資金稼ぎの一環として開かれる様になった。「吉岡カメラン裁判」「松永裁判」の支援の為に全国から無償で集められた本が、相場からいうとべらぼうに安い値段で販売されたのである。私の友人はここで三島由紀夫の「花ざかりの森」の初版美本をわずか三百円で購入している。私はこれらの即売会にボランティアの販売要員として関わりを持ったが、今にして思えばこれが今日の私の仕事への最初の関わりであったといえよう。

古書即売会の盛況は商売として古本屋をやってみようという人々を生み出していく事となった。一九七三年から七五年頃にかけて石原誠氏(現北海道・サツポロ堂)の遊古堂ができ、首里の琉大裏には当時まだ学生だった野国昌健氏(現南星堂)が学友古書を店開きした。又牧志公設市場の中には南島書院(現西原書店)が、安里十字路には安里古本センター(現国書房)が、それぞれ佐藤氏からの本の

仕入を元に開店したのもこの頃である。この時期は店舗数も少なく、商売としての目新しさもあって、売買ともに結構面白味があったという。

一九八〇年代から八二年にかけてはロマン書房、現代書院、創流書院(現南星堂)、緑林堂書店が次々と宜野湾市の琉球大学・沖縄国際大学周辺に店を開き、それまでの那覇の古書店とあわせ、今日の沖縄古書業界の骨格が形成されたのである。

私は元々は古本屋の客の方であつた。県内の即売会は勿論、都合で上京したりした際は必ず神田で一日をつぶしていたのである。そもそも沖縄に移りすむ前、東京周辺に住んでいた頃にはせどり屋の真似事をした事もあつたし、給料の大半は本に消えていく様な生活を送っていたのである。

その様な中で、古本屋をやるという話が出たのは一九八〇年頃だったろうと思う。当時私はつぶれかけた印刷屋を再建して引きつこうとしてうまくいかず、閑散とした事務所が無偽の時を過ごしていたのだが、以前の仕事での私の後継であつた新垣裕之氏(現書肆あらかき)が遊びに来て、その雑談の中で「古本屋でもやろうか」と言った所、

それが幻想であることはすぐにわかった。当時から今日に至るまで学生はお客様というにはほとんど無視しえるレベルである。

そうこうしている内に一九八三年頃になるとロマン書房によるチェーン店の展開と派手な宣伝が始まった。これは古本屋開業予備軍を堀り起す事となり、同業者が二年ほどで一挙に五〇店を超えるまでになったのである。同業者がふえると当然利害関係の対立も激しくなり、この頃から一九八六年頃までは、組合内部、あるいは組合対非組合の様々なトラブルも発生し業界としては困難な時期であつた。

結局この時期を乗り切った業者が、今日の沖縄古書業界を支えているといえよう。

一九八七年に遅い結婚をしたのを機に、当時那覇店(一九八五年開店)をみていた盟友の新垣氏と経営を分離する事になった。従つて一九八八年以後は同じく緑林堂の那覇店・宜野湾店を名乗ってはいが、経営上は全く別となった。緑林堂那覇店はその後屋号を書肆あらかきに換え、現在西原町に店を構えている。

新垣氏には随分世話になった。開店当初の金策は彼の力に

の事業は一九八一年春の三越での展示即売会であつた。この三越での即売会はその後の緑林堂書店の営業展開にとって大きな跳躍台となった。というのは、当時最も店坪の小さな、そして開店したての我々が、即売会の全売上の四割を占める売上を記録したのである。そしてその中心はあの清水の舞台から飛びおりの気持で購入した「中山伝信録」であつた。仕入値七〇万、売値が九五万、デパートや組合の手数料をひくと利益はわずかに二、三万であつたが、いいもの、珍しいものであれば多少高値であらうとも売れるのだという事を深く認識したのである。これは自信にもつながったし、又、優良のお客様を顧客としていく事にもなったのである。

客の委託品である夢二の版画軸(三越で売れなかったのだ。)を出品するとともに、分野もへったくれもなく、とりあえず片っ端から札を入れていった。店には在庫が何にもなくなつていたのである。発声が始まるとめっぽうやたらに「緑林堂」の声が入る。そばで同業者が「緑林堂で何だ? いやに高く買つてやるなあ」とささやきあつてゐる。こちらはもうカッカとして穴に入りたい気分であつた。ある若手の同業者がみかねて「もつと値段をおさえた方がいよ」と忠告してくれたのを覚えてゐる。

結局黒っぽくて見映えのするものや、岩波・みすず等の本を随分高くたくさん買い、沖縄に持ち帰った。夢二は二二万で八勝堂さんに買って頂いた。又、市場で声をかけて頂いた文学堂さんからは琉球人の書物入手した。更に、神田の店を片っ端から回り、戦前のものを中心に郷土誌関係の古いものを総ざらいした。この最初の東京での仕入も又、その後の店の方向性を決める一つの要素となつてゐる。

沖縄に帰った時は文字通りのスッカラカンであつた。郷土史誌を中心に図書館や資料館への

彼が「古本屋だったら協力するよ」というので意気投合し、ほぼ一年近い準備を経て、旗上げをしたのが一九八一年一月であつた。

私のわずかな自己資金(確か二、三〇万程度)と友人からの借入金、そして新垣氏の出資金をもとに、那覇市小緑の宇栄原団地公設市場内に店を構えたのである。店坪約五坪、家賃はわずか三五〇〇円であつたが、客の数や売上げも家賃相応であつた。

私は元々社会科学系中心で考えていたのだが、大学で琉球史を専攻してきていた新垣氏の提案で和本を含む郷土史誌を抜おうという事になり、開業する三、四ヶ月前には、店の看板とばかりに、神田の老舗から「中山伝信録」の明和三年版を入手するなどして、開店当初より人文系と郷土図書の専門店を旗印としたのであるが、これは今日に至るも基本的に変わっていない。もともと社会科学系の本はあまりの売上げの悪さに徐々に棚を追われていつてゐるが……。

一九七〇年代末頃から県内では組合結成の動きが高まり、我々の店開きと組合結成はほとんど同時であつた。組合の最初

広重拾遺

楽書版オリジナルカラープリント
七葉 解説リーフレット付
未確認の東海道五十三図会・神名川(藤慶)、今やう倭文庫、稀少とされる新板江戸名所・御殿山之景(短冊)、新撰江戸名所・不忍池新玉堤春之景など。
頒価 二千円(送料サービス)
〒980仙台市青葉区角五郎1-5-38
武田鉄太郎
振替 02260-0-8341